沿革前篇

第一　創立記

第二　創立時代より開校十周年まで

沿革

第一　創立記

創立事情　大正七年原敬内閣――中橋徳五郎文相――の時、高等諸學校の創設と擴張とが計畫され、大正八年から十三年に至る六ケ年繼續事業として第四十一帝國議會の協賛を經たが、本校は第十一高等商業學校として大正十四年開校を豫定された時に創立の萠芽を見る。

當時まで横濱には高等專門學校が一つもなかつた。諸學校の集中してゐる帝都に近接してゐることが、横濱に高等教育機關の設置を等閑にした主なる理由であらうが、これは甚だ遺憾のことであつた（六大都市中、大學を持たないのは獨り横濱のみといふ現狀も同樣に遺憾である）。ここに原内閣の創設計畫によつて商業工業の專門學校が一時に設置されることとなつたが、これは些かも不審ではない。議會に於てもその設置の場所について相當突込んだ質問が放たれたに拘らず、横濱への商工二校の新設が組上に上らなかつたのは、當然あるべきところになかつた餘隙を漸く充たすことが出來たからにほかならない。

大正七年に、かかる高等專門學校の創設計畫が時の内閣に取り上げられたのは、第一次歐洲大戰中及び戰後の日本經濟の躍進を反映するものであつて、この經濟界の發展に照應して高等諸學校への入學志望者は著しく增加

した。然るにこれを容れるべき學校の數が少く——高等商業學校では東京、神戸、長崎、山口、小樽の五校——ために入學競爭は激甚を極めて試驗地獄を現はし、不幸にして入學志望を達しなかつた青年の多數は所謂浪人として、一年乃至數年を不安焦燥の裡に過させる不幸に陷れるが、これは社會風敎上甚だ面白くない現象であつたから、この試驗地獄を緩和して青年の向學心を出來るだけ充たすと同時に、併せて有爲な人材、敎養の深い人間への社會の要求に應へる必要が痛感されたからである。

かやうに躍進日本經濟の反映として本校の設立が確定したのである。さうして橫濱としては先づ大正九年に高工が設置され、本校は十三年度に設置、十四年開校の豫定であつた。

創設計畫實施の翌大正九年秋には早くも好況の反動があらはれ恐慌が來襲し、反動期の不況漸く深刻なものがあつた折、十二年九月一日の關東大震災といふ大きな衝擊を受け、京濱地方の痛手は非常に深かつたのは事實だ橫濱だけの家屋の倒壞及燒失七萬四千戶、死傷者行衞不明者合計六萬五千人といふ愕くべき多數の犧牲を出し、巨億の財富が烏有に歸したのだから、復興果して可能なりやを一時は危惧したのも無理ではない。けれども試煉に堪え復興の意氣に燃えた京濱の罹災者は立ち上つて燒跡にはやくも假小屋を建て復興に全心身を打込んだ。殊に、一小區域を除いて悉く灰となつた橫濱の復興は、それだけに並々ならぬ努力が必要だつた。橫濱實業界の中樞であつた生糸及絹織物貿易の關係者は、神戸に事業を移さねばならなかつたが、再び元の橫濱に復興し睹經濟施設を整備しなければ貿易第一港たる面目を躍如たらしめることは出來ない。縣市民の辛苦は並大抵ではなかつたが、政府もまた絶大の支援を惜しまず復興事業は着々と進捗して行つた。既定計畫では十四年開校の豫定であつた本校が一年繰上げ開校に變更されて大正十三年開校と決定したのは震災直後であり十二月十日には夙くも文部省直轄學校官制を改めて本校が加へられたのも、畢竟本校を以て橫濱復興の魁たらしめんとする官民の熱意にほかならなかつた。

かくて大正十三年開校と決定した本校は、十二年十二月十八日長崎高等商業學校田尻常雄校長が本校校長を拜命し、續いて下田禮佐敎授、齋藤、武石兩書記が任命されて、ここに創立事務、開校準備が開始されたのである。

當時、文部省も燒失して假建築が出來上らなかつたため、丸の內の蓬灣銀行の二、三階を借受けて文部省の事務が執られてゐたが、隨て本校の創設事務もこの蓬灣銀行の二階の一室で始められたのである。この部屋は六坪ほどの極めて狹い室であつた上に、この年度に同時に創設される高松高商、長岡高工、岐阜高農の三專門學校の關係者もともに机を並べて執務してゐたのだからお互に目白押しの狀態でありながら創設といふ基礎工作に執れも沒頭して寧日なき有樣であつた。

この創設當面の問題は學校敷地と校舍建造の二つであつた。敷地は、政府と縣市との交涉の問題であつたが、敷地候補地として神奈川齋藤分、本牧箕輪蓬、南太田富士見蓬の三ケ所が擧げられてゐたが、結局南太田富士見蓬即ち現在の土地が選定されることとなつた。ここは當時多少の畑地のほかは雜木林で、どこから登るにも急坂

であつたから人の往來も稀で道らしい道さへなく、敷地も邸あり谷ありで起伏し地均し工事が容易でない場所であり、毎日の登校には相當の不便を伴ふと見られたが、それだけに俗塵を離れてをり、前面に横濱港を俯瞰し、後背には富嶽の靈峰を控え、學園建設の地としては却て惠まれてゐるといへる。

敷地決定までには相當の迂餘曲折があつたが、それは學校當局としては關與するところがなかつた。學校が創設に當つて肝膽を碎いた問題は校舍建築であつた。

本創設事業の豫算明細書を一見すると判るやうに新設學校の校舍は極く一部の特殊建物以外は全部木造建築となつてゐた。本校もまた延千八百七十九坪中、鐵筋コンクリートの部分延三百三十坪を除いた千五百餘坪は木造建築の豫定でありその豫算が計上されてゐたのである。然るに横濱大震災に全市家屋殆んど倒壞燒失の厄に遭つた直後であり、横濱百年の計から見ても、その國際港たる地位から考へても、鐵筋コングリートの耐震耐火建造物が要望され、堅牢なる毅然たる學舍が翹望されたのであるが、田尻校長は赴任と同時にこの堅牢校舍の實現を深く決意するところがあつた。けれどもこれは實際には容易ならぬ難事業であつた。といふのは政府の事業施設は、總豫算書の附屬明細書に揭記された内容に基いて實施されるのが原則である。この内容に根本的變更を加へることはおそらく不可能といふのが通則である。木造を鐵筋コンクリート造にすることは先づ建築費が著しく遖ふ、これまた難點である。この大障碍を突破して堅牢校舍の實現を來すことは容易でなく、交涉に交涉を重ねて一、二ケ月が忽ち經過してしまつたが、遂に當局も本校側の熱心に動かされ且つ環境から見てかかる建築をより

妥當なりとしたから、ここに本省要路の理解を捷ち得て、遂に寄宿舍、生徒集會所その他急を要せざる建物の建築を延ばして本館建築費を捻出するといふ妥協點に到達し、學舍建築の問題は漸く解決した。この間における田尻校長及び齋藤照之助會計主任の勞苦は一方ならぬものがあつたと想はれる。直轄學校において本館を鐵筋コンクリート建としたのは本校を以て嚆矢とするが、設計變更といひ學校最初の鐵筋建築のため本省建築課が細心の準備を要したこととといひ、新設或は復舊工事の繁忙さといひ、孰れも本建築着手を遲延させるものばかり重なつて、本校側の焦燥の裡漸く、十三年六月十八日に本校敷地に建築工事が起され物置一棟が八月十日に竣工、文部省建築課横濱出張所の標札がここに揭げられ、現場に工事の基礎が成つたのである。十一月に入つて生徒控所、柔劍道場、銃器室等が着工され翌年三月竣工した。これは本館が竣工するまで内部を幾つかに仕切り、破目板を張つて教室に使用した。本館工事は、十二月十五日入札の結果、竹中組の手によつて請負はれ、大正十五年三月落成したのであるが、十四年の四月新學期からは高工の假校舍の一偶から現在の清水ケ丘の假教室に移轉して授業を開始し事務を執つたのであるから、草創の際とはいへ、假教室の不備、登校路の險惡泥濘には當時の教職員も生徒も勘からず惱まされたものである。けれども假りにも我家の氣易さと親しさとは、高工の校舍に間借りしてゐた一年間の經驗を持つものには十分に味へたところだ。

—二—

本校當初の建築豫算及びその後の建築變更の內容の詳細は次の通りである。

施行豫算各目明細書

本館	木造二階建	一、〇九二坪（延坪以下同ジ）	
講堂	同平家建	一一七坪	
實驗室	同二階建	二七〇坪	
特別教室	同平家建	七〇坪	
商品陳列室	鐵筋コンクリート二階建	一九二坪	
倉庫	同三階建	七二坪	
瓦斯發生器室	同平家建	六坪	
倉庫	同二階建	六〇坪	
計		一、八七九坪	

この建築費次の如し

木造	坪數 一、五四九坪	坪當一八〇圓
鐵筋コンクリート建	坪數 三三〇坪	坪當三五〇圓

隨て上述の建物を金部本館內に取入れ、これを鐵筋コンクリート建とすることは、單に施行豫算の變更手續に關する問題のみではなく、かくて生ずる豫算金額の不足をいかにして捻出すべきかといふ根本問題が解決されない限り、其の變更實施はまづ不可能と看なければならなかつた。それが本校當事者の熱心な努力によつて本館鐵筋コンクリート建と決定したことは既に敍べた通りであるが、十三年十二月十五日入札即日開札の結果は意外にも次の如く有利な契約を結ぶことが出來た。

本館鐵筋コンクリート建延總坪	一、一八三坪九八
落札價格	四二五、八〇〇圓（坪當二三二圓餘）

豫定價格　五八六、二三四圓（坪當三二〇圓餘）

差引　一六〇、四三四圓

卽ち豫定價格より十六萬圓約三割近き金額が浮いたのだ。しかも落札者は堅實な竹中組であつた。當事者は實に歡喜したのだが、それは無理がなかつた。蓋、本館設計の變更のために他の附設工事が相當に縮減を余儀なくされて坪數において六割以上の削減をして漸く建築費を捻出することとしたのであるから、いま入札の結果十六萬圓の剩餘金が出來た以上、犧牲となつて縮減された建物を出來るだけ復活させ得ることとなつたからである。

かくて寄宿舍と體育館の建設及び暖房裝置を施設することが計畫され、本省との間に十數度の折衝を重ねて次に掲げるやうな設計變更計算書が出來上つた。寄宿舍は昭和二年九月落工、同十二月竣工。體育館は同二年一月十三日落工、三月末日竣工。實に、直轄諸學校中出色の體育施設は、この體育館の建設に基礎が置かれたのである。

設計變更計算書

實施豫定額

工事名稱	構造	坪數	單價	金額
寄宿舍食堂浴室及賄所	木造平家建	八〇	一八〇 一四、四〇〇	
給水瓦斯及電燈				二一、四六八
周圍境界及地均シ並排水				一七、〇〇〇
既濟ノ入札剩餘金				一八〇、二八二
合計				二三三、一五〇

要設計變更額

工事名稱	構造	坪數	單價	金額
同上	木造平家建	一二〇	一八〇	二一、六〇〇
雨天體操場兼體操用具置場	鐵骨木造平家建	一二六	二八〇	三五、二八〇
倉庫	木造平家建	四五	一八〇	八、一〇〇
學生集會所同供待所及自動車庫		六六	二〇〇	一三、二〇〇
		一五	一五〇	二、二五〇
本館付帶工費				六、五〇〇
暖房給水瓦斯電燈				一一四、五〇〇
周圍境界地均シ及排水				二三、二九〇
合計				二二四、七二〇
差引殘高				八、四三〇

創立の年　臺灣銀行二階の假事務室で凡そ三ケ月、田尻校長、下田教授、齋藤武石兩書記の四人で創設事務と本校規程と生徒募集準備とが進められた。田尻校長、下田教授、武石書記の三氏は長崎高商から、齋藤書記は長崎醫大から孰れも創設の意氣に燃えて轉任した人々だし、校長さへなほ四十八歳の壯年期にあつたのだから蓋し創設者としては適役揃ひであつたらう。

間もなく數名の教官を加へ、大正十三年三月二十七、八、九の三日間、横濱、東京、京都、金澤の四ケ所で入學試驗を行つた。受驗者は一、〇二八名の多數に上つた。これより先き、本校の本據は、このほど漸く二、三棟竣工した弘明寺の横濱高工の假校舍の一部に据はり、事務はここで執ることとなつてゐた。受驗生一、〇二八名中、一三五名を選拔入學を許可して大正十三年四月二十一日始めての入學式を擧行し、翌日から高工校舍の一部を使用して授業を開始した。

創立の年は勿論一學年だけであつて、その各擔當教官は次の通りであつた。

國語、漢文、世界近世史	栗林敎授
商業地理	下田敎授
簿記	古館敎授
法學通論、民法	不二門敎授
英語	河村敎授
經濟原論	井上龜三講師
フランス語	德增敎授（九月以降）
	增田俊雄講師
商品學	時田敎授（九月以降）
商業英語	横山秀講師
商業算術	渡邊輝一講師
體操	小幡助敎授
體操、敎練	下津屋助敎授
珠算	石川（小白）講師
修身	山崎講師
支那語	友枝講師
英語	清水元助講師
獨逸語	デヴイス講師
	渡邊輝一講師

この教授陣を見よ。教育上の錬達の教官と新進氣鋭の若い教官が巧みに配合されてゐるのだ。古館教授は一ツ

橘で田尻校長と同級であり大倉商業に長く教鞭を執つた長老であるし、下田教授は長崎高商に、栗林、河村、時田、小幡、下津屋各教官はそれぞれ各學校で講義の經驗を持つてゐた。不二門、德增兩教授は文部省在外研究員として滯歐留學から歸朝したばかりだし、横山、渡邊、井上講師は大學を卒業したばかりの潑剌たる青年教官であつた。先輩を持たない第一回入學生は、經驗ある教官に各種制度の組織を指示され、青年教官を指導者協力者として各種學生組織の創設に懸命の努力を拂つて、文字通り學校一體化の實を示した。

學友會もかうした雰圍氣の裡に着々と準備が進められ、次の如き各部を包括して設立された。即ち、總務、雜誌、語學、講演、音樂、庭球、野球、競技、蹴球、劍道、柔道の十一部が置かれ、會長に田尻校長、副會長に古館教授を推戴し、各部に部長副部長が任命され、纏いて生徒會員の幹事及び委員が發表された。生徒會員の會費は年額十圓、入會金は五圓と決定した。學友會誌第一號は夙くも十四年二月二十三日に發行された。

かくて狹い高工の假校舍の一部を借受けた不便不如意な環境の裡に創業一ケ年の授業が續けられ、その間に各種の學校施設の內容充實の準備が進められた。南太田丘上の現在の校庭がぽつぽつ出來上りかけて來るや、學生達は高工假校舍から、ここまで出かける不便を意とせず、伸び伸びとここで運動競技に汲頭した。現在の校舍に引移つてからも、山を堀り崩して地均をしたのだから校庭は赭土で歩らかく、風が吹けば土埃りで眼をあいてゐられない始末だつた。

大正十四年三月末待望の南太田假教室への移轉が實現した。四月からはいよいよ自分の學校に登校し得るのだ。それにしても高工自らが假校舍の不如意の裡にありながら、本校へその一部を割いて一ケ年間、相ともに不便を忍んで貰つた好意に對しては、感謝のほかなく、一日高工教職員を招いて、ささやかな感謝の饗宴を張つた。かくて十四年三月を以て高工假校舍を去つたのである。

本校所在地町名	創立當時	横濱市南太田町
	現在	横濱市中區滑水ヶ丘
本校敷地坪數	創立當時	一四、一三八坪
	現在 本校	一四、九〇六坪八八七
	寄宿舍	一、四四八坪

第二　創業時代より開校十周年まで

（大正末期より昭和九年まで）

一　教育組織

學科課程　大正十三年創立に當つて學科課程が制定された。それは既設高商の學科課程を參考し斟酌して作られたものであつて、當時一般的にさうであつたやうに課目羅列主義を採り授業時數は毎週三十五時間といふ、かなり多い時間を課してゐた。學科目と各學年の毎週教授時數とは次の如くであつた。

學科目＼學年	第一學年 第一學期 中學出	第一學年 第一學期 商業出	第一學年 第二學期 中學出	第一學年 第二學期 商業出	第二學年 第一學期	第二學年 第二學期	第三學年 第一學期	第三學年 第二學期
修身	一	一	一	一	一	一	一	一
國語漢文	三	三	一	一	一	一		
作文								
商業通論	三	三	二	二	二	二		
簿記法	一	一	一	一				
貨幣及銀行					三	二		
外國爲替							二	
取引所							一	
交通論							二	三
稅關及倉庫								二

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年
保險學	二	二	二
簿記	三	二	二
英文商記	二	一	一
會計學	二	二	二
原價計算	二	二	二
商工經營	二	二	二
商業地理	二	二	二
海外經濟事情	二	二	二
商品學及商品實驗	三	三	
商業實踐	二	二	二
經濟原論	三	三	二
商工心理學	三	三	二
商業政策	二	二	二
工業政策	二	二	二
植民政策	二	二	二
財政學	二	二	二
統計學	二	二	二
法學通論	三	二	二
民法	三	二	二
商法	三	二	二
國際公法	二	二	二
商事關係法	二	二	二
國際私法	二	二	二
英語	八	八	七
第一支那語	八	八	七

二外國語	露西亞語	三	三	三	二	二	二	二
	獨逸語							
	佛蘭西語							
	英語							
數學		二	二	三	二	二	二	二
商業算術		二	二	三	三	二	二	二
珠算		一	一	一	一	一	一	一
理化學		二	二	二	二	二	二	二
工學		二	二	二	二	二	二	二
商業史		二	二	二	二	二	二	二
世界近世史		二	二	二	二	二	二	二
研究指導		一	一	一	一	一	一	一
體操		三	三	三	三	三	三	三
合計		三五	三五	三五	三五	三五	三一(四)	三一(四)

備考

一、本表中授業時數ニ括弧ヲ附シタルハ選擇科目ニシテ第三學年第一學期ニ於テハ植民政策、統計學及商事關係法ノ中二科目四時間ヲ、同第二學期ニ於テハ工業政策、商工心理學及國際私法ノ中二科目四時間ヲ選修セシム

二、第二外國語ハ支那語、露西亞語、獨逸語、佛蘭西語及英語ニ就キ其ノ一ヲ選修セシム但シ一旦選修シタルモノハ中途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルヘシ

三、以上ノ外尚隨意學科目トシテ志望者ニ限リ經濟史、論理學、心理學、哲學概論、教育學、社會學等ヲ履修セシム經濟史ハ第三學年ニ於テ一學年ヲ通ジ、論理學ハ第一學年第二學期、心理學ハ第二學年第一學期、哲學概論ハ第二學年第二學期、教育學ハ第三學年第一學期、社會學ハ第三學年第二學期ニ於テ之ヲ課ス

學科目の數は、實に四十二の多數で、これでは學生は應接に遑ないであらう。この學科目課程を見ると、英語に八時間が充てられてゐる以外に、第二外國語の中で更に英語を選修し得る點と、基礎學が正科目に勘いのを考慮して隨意科目にこれを取り入れて志望者に履修の道を開いてゐる點等が目立つ。けれども最も顯著な特色は研究指導即ちゼミナール制を創立當初から執つてゐる點であり、兩來學科課程の改正は三度行はれたが、十人內外の少數の生徒を一人の教官が每週一、二時間專門學科の指導をするとともに親しく生徒に接して教養上の相談相手となるといふ、この制度は繼續强化され、教官も亦熱心にこの制度を支持し活用してゐる。昨十七年文部省の方針に則れる高等商業學校學科課程の全面的改正に際して、この制度は「演習」といふ名稱で執り上げられ、各高商に勸奬することになつたのは、師弟近接教育の効果を認めたからにほかならぬ。

創立當時制定の學科課程が羅列主義であつて、基礎學と專門學との間に體系が樹てられてゐない憾みがあり、その合理的整頓は兩來多年の懸案であつたが、六年六月から委員の手で具體案を審議研究の結果成案を得たので十一月教官會議にかけて檢討可決して文部省に申請、その認可によつて、七年四月の新學期から實施することとなつた。これが第一次改正である。

改正の主眼とした點は次の如くである。

一、學科の體系的配列　即ち第一學年に於ては基礎課目に意を注ぎ、中學、商業出身者の知識の平均化をより徹底せしめ、第二學年には主として總論を、第三學年に入つて特殊科目を講ずることとした。

二、第三學年は選擇科目を主體とする。卽ち約二十の提示課目の中、各自十を選擇せしむ。これによつて教授側の商業經濟課目の負擔は更に過重となるが學生にとつては多大の便宜を蒙るわけである。

三、ゼミナール重要視　第二學年に於て一週一時間のプロゼミナールを設置し、專ら原書講讀に充て、第三學年に於ては之を正課となし一週二時間を割當てること。プロゼミナールからゼミナールへの移動に際しては學生の自由變更を許す建前であつたが、實際上は全く變更なく二ケ年間を同じ指導教官に屬してゐた。

第一次改正學科課程表（昭和七年）

必修學科目	選擇學科目	第一學年 第一學期	第一學年 第二學期	第二學年 第一學期	第二學年 第二學期	第三學年 第一學期	第三學年 第二學期
修身		一	一	一	一	一	一
體育		二	二	二	二	二	二
國語作文樣法		(中)三 (商)四	二				
英語		(中)八 (商)一〇	(中)八 (商)一〇	七	七	五	五
	英會話					(二ヶ年)	(二ヶ年)
其他ノ外國語			四	三	三	三	二
數學		(商)三	(商)二				
高等數學				一	一		
商業數學				(中)二	(中)二		
珠算		(中)一	(中)一				

理化學		(商)二	(商)二				
工學		二	二				
近世史		(商)一	(商)二				
法學通論		四	四				
民法		二	二	二	二		
商法		二	二	二	二	二	二
	商事關係法			二	二	(二ヶ年)	
	國際法			二	二	(二ヶ年)	
	憲法			二	二	(二ヶ年)	
經濟學原論		二	二	二	二	二	二
	景氣論						(二ヶ年)
	經濟學史						(二ヶ年)
商業政策						(二ヶ年)	
商業史						(二ヶ年)	
商業地理		二	二				
外國經濟事情						二	二
財政學						二	二
統計學						二	二
商業通論		(中)二	(中)二				
商業簿記		(中)四	(中)二				
銀行簿記		(中)二					
工業簿記及原價計算						二	
英文簿記及タイプライティング						一	一
會計學						二	二

會計監査	二	二	二	二	二(一)	一
經營經濟學	二	二	二	二	二(一)	一
交通論	二	二	二	二	二(一)	一
海運	二	二	二	二	二(一)	一
陸運及空運	二	二	二	二	二(一)	一
保險論	二	二	二	二	二(一)	一
海上及火災保險	二	二	二	二	二(一)	一
生命保險	二	二	二	二	二(一)	一
金融論	二	二	二	二	二(一)	一
國際金融論	二	二	二	二	二(一)	一
銀行經營論	二	二	二	二	二(一)	一
貿易市場論	二	二	二	二	二(一)	一
取引所	二	二	二	二	二(一)	一
商品學及商品實驗	一	三	二			
內外商業實踐				二	二(一)	一
經濟心理				二	二(一)	一
社會學				二	二(一)	一
社會政策				二	二(一)	一
研究指導				二	二(一)	一
特別講義				二	二(一)	一
合計	三四	三四	三四	三四	二六(八)	二五(九)

備考

一、第一學年ニ於テ（商）印ヲ付シタルハ商業學校出身者及之ニ準ズル者ニ（中）印ヲ付シタルハ其ノ他ノ者ニ之ヲ課ス

二、選擇學科目ハ第三學年ニ於テ第一學期十八時間ノ中八時間ヲ第二學期十九時間ノ中九時間ヲ選修セシム

三、其ノ他ノ外國語ハ支那語獨逸語佛蘭西語西班牙語和蘭語ニツキ其ノ一ヲ選修セシム　但シ一旦選修シタルモノハ半途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルベシ

從來のものに較べて敎授時數は一時間減少したが、學科目はいよいよ細分されて來た。敎官數の豐富な大學並の學科目細分で、敎官は極めて少いのだから一敎官の擔當學科目は三乃至四の異科目分擔となつた。不思議なことには、大勢はこの負擔の過重となる改正を敢行するにあつたことである。この制度の缺陷は間もなく明瞭となつたが、他から强制されたものではなく、自ら好んでこの改正を敢行したのだから全く自繩自縛に陷つてしまつた。昭和十五年の第二次改正はこの經驗に基き、缺陷是正を目的として行はれたのである。

學年學期　學年は二學期制とし、第一學期は四月一日より十月三十一日まで、第二學期は十一月一日より翌年三月三十一日までとした。隨て試驗は學期試驗、學年試驗各一回宛である。試驗の結果學年成績評點三十點以上五十點未滿のもの三科目以內にして、諸學科目總平均六十點以上を得たるものに對しては其の學科目について再試驗を施した。この再試驗制度も理想通りには行かず却てこれを惡用する懸念さへあつたので後にはこれを廢し現行の如き制度を執ることとなつた。

訓育の方針　本校の生徒心得第一條は生徒の心得べき道を儼として示してゐる。卽ち

第一條　生徒ハ校規師訓ヲ遵奉シ左記綱領ヲ確守スベシ

一、德操ヲ磨キ學業ヲ勵ムベシ
二、心身ヲ鍊リ質實剛健ナルベシ
三、禮節ヲ尚ビ信義ヲ敦フスベシ

この大綱を基礎として訓育し「信頼し得る人物」たらしめんとするのが本校訓育の方針である。學業錬磨には缺席は禁物である。本校は授業時數の三分の一以上を缺席したものは、原則として受驗資格を喪失するといふ規程を設けて懈怠的缺席を防止するとともに（生徒心得第七條）卒業に當り、皆勤者及精勤者には賞狀を授與してこれを褒賞し、更に數年後には思想善導發を劃いて皆勤、精勤賞を與へることとした。又特待生制度を規定し（規則第二十六條）品性學業、衆の模範とするに足るものを選んで特待生とし、次學年度中授業料を免除し、學業琢磨に拍車をかけさせるとともに優秀生を表彰することとした。一、二學年より進級するに際して毎年各學年それぞれ二人乃至四人の特待生を選んでゐる。

二　創業の完成

全學年完成　第二回入學試驗期が巡つて來た。志望者數は一、一四三名で、第一回の時より百二十名ばかり多い。試驗地は本校のほかに京都、福岡とである。第三回入學志望者は九四七名で前回より二百名ばかり減つた。試驗地は本校と京都である。本校以外の土地で試驗を施行したのは、志願者を全國的に募集し、各地方の特色を綜合して學生相互の間に地方的特質を接觸攝取させて、偏らぬ校風を培養せんとする趣旨によつたのであるが、創立四、五年を經過し大體所期の目的を達したことと、本校の存在が全國に滲透して各地から志願者の集る見透しがついたので、昭和三年までで地方に於ける試驗をやめた。

第二回は一五四名、第三回は一五一名の入學生を以て入學式を擧行し、かくて一學年から三學年まで全學年が揃ひ、四百五十の元氣のよい優秀な生徒が學園に充滿することとなつた。第三回入學生は入學と同時に現在の白亜の本館で受講したが、第一回生の如きは一年の時は高工の間借で、二年の時は現在の生徒控室で、三年の時に漸く本館に移るといふ風に毎年引越し狀態を續けたものだ。

施設漸次整ふ　當時の文相岡田良平氏は大正十四年六月十日來校、本校の狀況視察を遂げたが、本館は建築中で、例の假教室や假事務室での狀況を具さに巡視されたのである。十五年十二月九日敎育勅語謄本を拜戴、昭和三年十月九日、畏くも　天皇皇后兩陛下の御眞影を拜戴して、ここに學園の基本が整つた。十五年三月本館竣工翌二年三月體育館、十二月寄宿舍が竣工するといふ風に諸施設は順を追ふて整備し、內容外觀ともに一通り充實したのである。かくて早くも第一回生の卒業期を迎へた。

昭和二年三月十五日に第一回卒業證書授與式を擧げて百十七名の本校最初の卒業生を社會に送り出したのであるが、先輩を持たぬ新卒業生の就職狀況こそ、田尻校長の最も關心を寄せたところであつて、假令高等の學術技藝を授け敎養を深からしめても、これを適所に就かしめて社會的活動をさせなければ、佛造つて魂を入れざるに

等しいとは校長の持論であり、殊に始めての卒業生のことであるからその就職狀況如何は微妙に將來に影響するところがあり、校長の苦慮はたしかに大きいものがあつた。

高等專門學校の創設擴張は好況時代の社會的要請に促がされたものであるが、創設擴張計畫の實施當初より既に恐慌續いて不況に見舞はれた社會が果して幾何の新卒業生を求むるであらうか。目出度く卒業はしたが向ふべきところが塞がれてゐては卒業生の歎きは察するに餘りがある。これは當時學校責任者のすべてに共通した惱みであり、それだけに就職運動が激甚を極めたのは當然であらう。

かうした不遇の環境にはあつたけれども、本校の卒業生は比較的惠まれた事情の下にあつた。否、一般狀勢から見れば頗る惠まれた事情にあつたにいへよう。それは偏へに田尻校長の獻身的奔走の結果である。田尻校長は長崎高商校長時代から既に「就職の神樣」と定評のあつた人で、平生から實業界巨頭要人と廣く交はり知己多く就職戰術は常に備へがあつた。これは實は言ひ易くして實行し難いことであるが、校長のはそれが全く身についてゐて少しも附け燒刃でない。明朗豁達、氣の置けない性格は知己を各方面に多くする。この人德を以て、しかも義務的事務的にするのではなく全く獻身的に就職の斡旋に東奔西走するのであるから、流石の不況時代に拘らず、日本銀行、三井、三菱等巨大銀行會社を始め各方面からの申込員數二百三十一に達し、卒業生中の就職希望者九十五人に對して二・七八倍といふ好況であつた。さうして卒業までに面會或は就職、試驗等の難關を突破したものは八十三名、殘れる十二名も卒業後間もなく各方面に就職して、不況時代としては幸先きよき出發をなし得た譯である。

かくて創業の大責務は果された。深刻なる不況の世運の間に在つて、入學志望者は年々一千人を前後し收容人員の七倍を數へ、しかも生徒の素質頗る良く、優秀なる人材養成の道場として社會の認承を得、卒業生の就職狀況また上述の如くであつたから、次に揭げる內容の整備と好學的活動と相俟つて、爰に創業は完成したといへるであらう。

三　研究調査機關

研究所、調査部創設　經濟學は社會科學といはれる如く、文化科學の中にあつても恒に社會事象と深き關係を持ち、恰も自然科學における實驗の必要なるが如く、實證的研究が必要である。本校教授陣も漸を逐ふて充實して來たから、この研究上の要望が具體化して、十四年匆々岩本敎授が創立準備に當り、十月十日の創立委員會によつて研究所規程が確定し、委員及調査部長が創立委員から選ばれた。常務委員古館敎授、調査部長岩本敎授以下八名の委員が別記の如き研究調査事業を擔當することになつた（研究所規程第三條參照）。

橫濱高等商業學校研究所規程（抄）

第一條　橫濱高等商業學校ニ研究所ヲ置キ橫濱高等商業學校研究所ト稱ス

第二條　本所ハ商業及經濟ニ關スル調査研究ヲ爲シ學術ノ進步ト實務ノ發達ヲ圖ルヲ以テ目的トナス

第三條　本所ハ左ノ事業ヲ行フ

一、商業及經濟ニ關スル調査研究
二、調査研究資料ノ蒐集及其ノ整理
三、講習會講演會研究會等ノ開催
四、公刊物ノ發行
五、調査研究ノ奬勵
六、其ノ他本所ノ目的ヲ遂スルニ適當ナリト認ムル事業

第八條　調査研究ニ關スル事務ヲ行フ爲メ調査部ヲ置ク

この研究所は當初專ら調査部の事業を中心とし、研究所自體としては特別の事業を行はなかつたが、研究所が幹事役となり委員が活動の中核體となつて次の如き研究會を作り逐次發展して、現在の太平洋貿易研究所の開設に誘導したのである。

讀後會　敎官が順次研究のため精讀した著書の紹介と批判を發表し、これを議題として討論する全敎官の會合。大正十四年六月第一回例會を敎官室に開き、爾後每月一回開催して十數回に及んだ。

貿易研究會　世界貿易の實證的研究を目的とし、次の如き地域的分擔を定めて每水曜日順次報告することとし、昭和十二年に入るや直ちに實行した。

德増　敎授	——イギリス。	渡邊　敎授	——イタリー。
井上雄三敎授	——ドイツ。	森田　敎授	——日　本。
井上勉三敎授	——アメリカ。	大竹　敎授	——フランス。
越村助敎授	——ロシア。	岡野　敎授	——世界貿易。

然るに報告が一巡した頃、森田敎授の渡歐、越村助敎授の應召のために、兩氏の擔當學科を殘留の敎授の間で分擔引受けることとなつて、新しい講義準備に忙殺され、研究報告會を繼續することは加重となつたので、一時會合を中止した。これは十五年に至つて、商學會研究報告會として復活した。これ等一聯の眞摯な研究會合の雰圍氣が漸く結實して十五年末の太平洋貿易研究所の開設となつたのであるが、同研究所については後述するところに讓る。

研究所季報發刊　調査部においては、商業經濟の內外各般に亙る調査研究資料を汎く蒐集整理し索引を作成すると同時に、謄寫して受入資料目錄及び重要經濟問題の論題目錄を每月各敎官に配布してゐたが、積極的に部員の研究乃至調査を資料として提供し同時に本校が未だ研究發表の機關雜誌を持たなかつたその缺を充たさんとして、昭和三年六月研究所委員會を開き、季報發行に決し、十月二十日、研究所季報第一號が發刊された。內容は次の如くである。

季報第一號目次

セリグマン「月賦販賣研究」の紹介　　德増　敎授
最近英國商業における集中と獨占　　井上勉三敎授
內外重要經濟日誌　昭和三年四月——九月
主要受入資料及定期刊行物目錄
雜　記

第二號は四年一月、大竹敎授の法律と契約の凋落（一）、下田敎授の南米經濟に關する二名著を讀みて、の二

つの紹介論文。第三號は同年四月、小宮山敎授の聯結貸借對照表に就て、第四號は同年八月、大竹敎授の前揭のものの續きと井上鎧三敎授のウエイト「消費經濟學」の紹介論文を載せてゐる。季報はこの第四號を以て新に發刊される商學會の雜誌「商學」に包攝されることとなり廢刊した。

商學會の設立と「商學」の發行　研究發表の機關雜誌を持ちたいことは、かねてからの念願であり、敎授陣容の充實は十分機關雜誌の內容を豐富になし得る自信があつたが、學校の機關雜誌は大なる市場性を持たないし、當時市場性多しといはれた一、二の大學の有名な機關雜誌さへ收支償はず、財政的行詰りに當惑してゐたことを洩れ聞いてゐたので、機關雜誌發刊には愼重の態度を執つてゐた。然るに卒業生及在學生の間から發刊の要望が起つて來たし、その發行を喜んで引受ける出版書肆同文館の森山醫二氏があつたので、昭和四年春、本校敎官と生徒とを以て會員とする商學會を組織し、この組織によつて雜誌「商學」を發刊する運びとなつた。

橫濱高等商業學校商學會規則

第一條　本會ハ橫濱高等商業學校商學會ト稱ス
第二條　本會ハ雜誌「商學」ノ發行ヲ目的トス
第三條　本會ハ事務所ヲ橫濱高等商業學校內ニ置ク
第四條　本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス
一、特別會員　本校敎官
二、普通會員　本校生徒
三、贊助會員　本校卒業生ニシテ本會ニ入會スルモノ
第五條　本會々員ニハ雜誌「商學」ヲ年二回頒布ス
第六條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、會長　一　名
一、幹事　若干名
會長ハ會務ヲ總理ス
幹事ハ會長ヲ輔ケテ會務ヲ處理ス
第七條　會長ハ校長之ニ當リ幹事ハ特別會員中ヨリ會長之ヲ指名ス
幹事ノ任期ハ二ケ年トス
第八條　會員ハ會費トシテ年額金二圓ヲ納ムルモノトス

會長　校長　田尻　常雄
幹事　敎授　下田　德佐
同　同　小山宮　敬保
同　同　德增　榮太郎
同　同　大竹　緑
同　同　井上　鎧三

かくて第一號は四年七月十日に發行され、三百二十三頁の堂々たる體裁と次の如き豐富なる內容を盛つて現はれた。

商學第一號目次
論說

鎖國時代に於ける支那の對歐貿易に就て　下田誠佐
聯結貸借對照表に關する問題若干　小宮山敬保
農家經濟に於ける勞働力の自己搾取　井上鐵三
CIF約款　ワルソー・ルール　不二門祖親
ヲールト・ホイツトマン論　西村稠

時論

最近の金佛禁問題　森田優三
賠償問題と獨逸の經濟　岡野鑑記

資料及紹介

ミルス氏の物價變動研究　森田優三
市販發油の研究　南祖康博

外郭研究團體　商學の發刊より一足先きに、本邦貿易の太宗たる生糸の經濟學的研究團體が井上鐵三教授を中心とし、本校若手教授と生糸貿易の學究的社員とによつて結成され、二年九月一日その機關雜誌「生糸經濟研究」が創刊された。井上教授は全心を打込んで生糸の經濟的研究に沒頭し、帝蠶ビル内に自ら事務所を設け大童の奮闘目覺しきものがあつただけに、不定期ではあるがその後發行された續輯とも學界、實業界の稱賛を贏ち得た。七年三月の第六輯以後は暫く休刊したが再び十年に至つて井上教授單獨で「生糸經濟研究所彙報」を發行した。これは一、二回で中止したやうだが、この間における同教授の學問的熱意には洵に敬服のほかなかつた。十四年四月忽焉として世を去つたが、春秋に富み且つ眞摯な學究として將來を屬望されたのに實に惜しいことを

した。

四　夜學部附設

夜學部の目的　本校は廣く門戸を開放して、晝間實務に從事するもののために專門學校程度の、商業上必要なる學術の講習を行はんとして、夜學部の附設を文部省に申請中であつたが、大正十五年四月廿八日附を以て認可されたので、直ちに講習生の募集を行ひ五月十日第一回の講習を開始した。

夜學部の規則は次の如くである。

横濱商等商業學校夜學部規則

第一章　目　的

第一條　本夜學部ハ主トシテ實務ニ從事スル者ノ爲ニ商業上必要ナル學術ノ講習ヲ行フ

第二章　講習期間及學科目

第二條　講習ハ毎年左ノ三期ニ之ヲ行フ

春期講習　四月ヨリ六月迄ノ間ニ於テ五週間
秋期講習　九月ヨリ十二月迄ノ間ニ於テ五週間
冬期講習　一月ヨリ三月迄ノ間ニ於テ五週間

第三條　毎期ノ講習ハ左ノ學科目中三科ニ付之ヲ行フ

商業通論　商業英語　商品學
商業地理　商工心理

貿易論　海外經濟事情　稅關
倉庫　金融　銀行
外國爲替　取引所　海運
陸運　海上保險　火災保險
生命保險
商業簿記　銀行簿記　工業簿記
英文簿記　會計學　商業數學
貿易實務（英語）　英文商業通信
經濟原論　貨幣論　財政學
商工經營論　統計學　經濟統計
商業政策　工業政策　社會政策
經濟史
法學通論　民法　商法
商事特別法　國際法
右ノ外隨時隙外講演ヲ行フコトアルヘシ

第四條　前條ノ學科目ハ時宜ニヨリ之ヲ分合スルコトアルヘシ
但シ六期ヲ通シテ十五學科目ヲ下ラサルモノトス

第五條　各學科目ノ講習ハ十回（二十時間）ノ授業ヲ以テ完了スルモノトス
但シ都合ニ依リ之ヲ增減スルコトアルヘシ

第三章　講習生

第六條　講習生ハ每期之ヲ募集ス

第七條　講習生ハ中等學校卒業者又ハ本校ニ於テ適當ト認メタル者ニ限ル

第八條　講習志願者ハ講習願書及履歷書ヲ提出スヘシ
講習ヲ繼續セントスル者ハ講習繼續願書ヲ提出スルコトヲ要ス

第九條　入學ハ願書受付ノ順ニヨリ之ヲ許可ス
但シ講習繼續者ハ右ノ順位ニ依ラスシテ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第十條　講習生ハ一學科目又ハ數學科目ノ講習ヲ受クルコトヲ得

第十一條　不都合ノ行爲アリタル講習生ハ之ヲ除名ス

第四章　講習證明及學力檢定

第十二條　講習精勤者ニハ講習證書ヲ授與ス

第十三條　講習證書ヲ有スル者ハ其講習學科目ニ付本校指定ノ期日ニ學力檢定試驗ヲ受クルコトヲ得

第十四條　學力檢定試驗ニ合格シタル者ニハ檢定合格證書ヲ授與ス

第十五條　十五學科目以上ノ檢定合格證書ヲ有スル者ニハ夜學部講習卒業證書ヲ授與ス

第五章　講習料

第十六條　入學ヲ許可セラレタル者ハ直チニ講習料ヲ納付スヘシ
一旦收納シタル講習料ハ之ヲ返還セス

一學科目一期ニ付　金參圓
二學科目一期ニ付　金四圓
三學科目一期ニ付　金五圓

第十七條　講習料ヲ納付シタル者ニハ講習券ヲ交付ス
講習券ハ講習時間每ニ之ヲ携帶スヘシ

講習會の經過　敎室は小使室傍の元の事務室を充てたので六十名を限つて募集した。男女共學を標榜したが、

講習場が、婦人には極めて不適當なこの山頭にあり、登校路は不氣味に暗いのでおそらく一人も婦人の聽講生はあるまいと想像してゐたが、案外にも第一回四十八名の中には三人の若い熱心な婦人を交へた。

第一回は五月十日から五週間毎日午後六時半から二時間一課目を講習し、三課目各十回を輪講して講了することとした。不二門教授の法學通論、德增教授の經濟原論（總論及生產論）、古館教授の商業簿記といふ講習科目であつた。五週間と云へば相當長い期間であり、しかも夜間この山へ登つて來るのだから餘程の熱心なものでなければ續かない。幸ひにも殆んど全部の聽講生が最後まで頑張つて好成績を收めて第一回を修了した。第一回聽講生の勤務先別は、官吏一〇、公吏四、銀行員九、會社員二一、小學校敎員三、新聞記者一である。

第二回以降の講習開始日は次の如し。

第二回	大正一五、	九、一三	第三回	昭和 二、	一、一七
第四回	昭和 二、	四、一八	第五回	同 二、	九、一九
第六回	同 三、	一、二三	第七回	同 三、	五、一
第八回	同 三、	九、一七	第九回	同 四、	一、二一
第十回	同 四、	五、六			

一回の講習に三課目宛としたから三十課目に亘り大體高等商業學校の學科目の全般が一通り講了したのである。ところで回が重なるにつれて聽講生の數は減少し第九回は二十五名、第十回は十七名となつた。これでは敎授側も張合がなし、學校の負擔も大きくなる。そもそも、この山の上で夜間繼續的講習をするといふのが無理であつたから聽講生の減少するのは當然である。かうした經驗から、市內の中心地に適當な會場が得られるまで夜學部は無期閉鎖することとなつた。

五　開校式

開校式祝賀日程　弘明寺高工の假校舍から南太田の假敎室へ、さうして三年目に漸く本館へ引移るといふ遉しい狀態だつたが、この間に三學年九學級は完成したので、いよいよ開校の式典を擧げることとなつて準備を進め大正十五年十月二十一日（木曜日）を以て式典の當日と決定、次の如き日程によつて祝賀行事を展開することとなつた。

開校式祝賀日程

十月二十一日（木）　開校式
　　提灯行列（夜）
十月二十二日（金）　名士學術講演會
十月二十三日（土）　大運動會
十月二十四日（日）　野球、庭球、卓球
　　柔道、籠球、大會
　　音樂大會（夜）
十月二十五日（月）　校內辯論大會

運動各部大會續キ

十月二十六日（火）　語學大會
十月二十七日（水）　學生演藝大會（夜）
十月三十一日（日）　蹴球大會、劍道大會
自十月二十一日　横濱文化史料展覽會
至十月二十六日　各教室裝飾　窓貼ポスター展覽會

開校祝賀式典　二十一日午前十時から講堂に於て岡田文部大臣臨場の下に盛大な祝賀式典が擧げられた。

開校式次第

大正十五年十月二十一日
午前十時

一、開式
一、君ヶ代合唱
一、工事報告
一、學校長式辭
一、文部大臣祝辭
一、來賓祝辭
一、祝電披露
一、生徒總代祝辭
一、校歌合唱
一、閉式

當日は天氣快晴、絶好の開校日和であつた。玄關には裝飾を施し、正門前及裏門にはそれぞれアーチを設け、屋上に國旗及本校徽章入の旗數本を樹て且つ萬國旗を吊し、校内各室には生徒の手に成る各種の裝飾があつた。

式は古館敎授の開式挨拶によつて開始、君ヶ代合唱の後、工事報告あり。次で田尻校長の式辭、岡田文部大臣の祝辭及び池田神奈川縣知事、有吉市長、ホルムス英國總領事、佐野商大學長、渡邊名古屋高商校長、東京、横濱商業會議所會頭の祝辭があつた。

式後直ちに披宴場（三階合併敎室）に於て祝宴を催し、宴了つて來賓を自動車にて市内の復興狀況等を案内、三溪園を廻る。尚主なる來賓に對し當日午後五時より市内八百政に市長の招宴があつた。

學校長式辭

本日本校開校式ヲ擧行スルニ當リ、文部大臣閣下ヲ初メ閣下各位ノ御臨場ヲ辱ウ致シマシテコニ盛大ナル式ヲ擧ゲ得マスルコトハ本校無上ノ光榮トシ、御厚情ニ對シ本校一同ヲ代表シテ厚ク御禮ヲ申上ケマス。又本校創設ニ當リマシテ文部當局ヲ初メ縣市官民各位ノ非常ナル御盡力ト御同情ニ對シ深ク深ク感謝ノ意ヲ表スル次第デアリマス。

此ノ記念スベキ機會ニ於テ簡單ニ本校ノ沿革及抱負ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シタイト思ヒマス。

本校ハ震災直後ニ創設セラレタル學校デアリマシテ大正十三年四月學生ヲ收容シ授業ヲ開始スルニ當リマシテ、本校舍ハ未ダ影ヲニ見ルコトガ出來ナカツタタメ、漸ク高等工業學校ノバラック建一棟ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ開始シタノデアリマス。所謂倉庫生活ヲナスコト滿一ケ年ニシテ翌十四年本校敷地ニ移轉シマシタ。然ルニ本館ハ建築ノ最中ニアツテ、漸ク生徒控所及武道々場ヲ仕切リ臨時敎室トナシ授業ヲ開始シマシタ。敎職員全部本館ニ移轉シマシタノハ漸ク本年ノ四月カラデアリマシタ。

以上述ベマシタ通リ本校ハ震災ニハ遭ハナカッタガ震災ニ遭遇シタルモノト殆ンド同一ノ不自由極マル生活ヲ續ケマシタ。併シコノ悲慘ナル生活ハ私達ニ大ナル刺戟ヲ與ヘ精神ヲ緊張セシメタルコトヲ感謝致シテキル次第デアリマス。

次ニ本校ハ如何ナル主義ヲ目標トシテキルカトイフコトハ短時間ニ之ヲ述ベルコトハ困難デアリマスガ、一言ニシテイヘバ凡テヲ信頼シ得ル人物ヲ養成スルコトヲ主眼ト致シテ居リマス。獨立自營タルト他ニ使用セラルルトヲ問ハズ自ラヲ深ク信ズルト共ニ他ヨリ安心シテ全任セラルル人物ヲ養成スルコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。カカル人物タルニハ品性高潔、思想穩健ナルト共ニ、進歩的ナ商業社會ノ進運ニ適應スルダケノ智能ト技倆トヲ有シ且如何ナル劇務ニモ堪ヘ得ル健康ヲ有スルコト等敢テ喋々ヲ要セザル所デアリマス。現時我國ニ於テハ人口ノ增加ト共ニ各學校出身者ハ何レモ其ノ就職難ニ困リ切ッテ居ル有樣デアリマス。カクノ如ク人ハ有リ餘ッテキルガ、全部ヲ任セ得ル信頼スベキ人物ハ曉天ノ星ノ樣デアルトイフコトハ實業界ノ有力者ヨリ常ニ聞クトコロデアリマス。之ヲ例ヘレバチョウド武藏野ニ草ハシナジナ多ケレド摘菜ニスレバサテモ少シトイフノト同一デアリマス。本校ハ武藏野原ニ生ヒ茂ッテキル雜草タラズシテ其ノ摘菜タランコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。

我横濱ハ帝都ノ玄關デアッテ文化ノ關門タルト共ニ實ニ我國ノ對外貿易上最モ重要ナル地位ヲ占メテ居ルノデアリマス。我國輸出貿易ノ大宗タル生糸ハ震災後ノ今日ト雖モ尚其ノ八割五分ヲ占メテ居リマス。我國總貿易額ノ三分ノ一ハ實ニ我横濱港ヲ經由スルノデアリマス。本校ガカカル地位ニアル關係上對外貿易或ハ海外發展トイフガ如キ事項ニツイテハ格段ノ注意ヲナシ研究ヲナシテ居ル積リデアリマス。

我横濱ハ過般ノ大震災ノタメ端カラ端マデ谷底ヨリ山ノ頂上ニ至ルマデ悉ク燃エ盡サレマシタ。一木一草ニ至ルマデ燃エ盡サレ殘ルハ灰ト燒ケタル土ダケデアリマス。コノ燃エ盡シタル灰ノ中カラ燒ケタル土ノ中ヨリ何物カヲ生ゼシメナケレバナリマセン。卽チココニ燃ユルガ如キ復興ノ精神ガ湧出シタノデアリマス。新ニ生レ變ッタ人物ガ出來タノデアリマス。而シテ何者ト雖モ之ヲ防ギ止スルコトノ出來ナイ緊張セル復興精神ガ市民ノ間ニ儼然トシテ湧出シタノデアリマス。自然ノ力ハ實ニ恐怖スベキモノデアルガ、マタ人間ノ人モ偉大ナルモノデアル。吾人ハコノ偉大ナル人力ヲ以テ自然ヲ征服セネバナラナイノデアリマス。今ヤ我横濱ハ震災ニヨリ生レ變ッタ人間ニヨリ緊張セル精神ヲ以テ横濱ノ復興ハ着々トシテ進捗シツツアルノデアリマス。此ノ時ニ當リ、コノ場所卽チ不二見ケ丘ノ高燥ニ於テ本校ガ呱々ノ聲ヲ上ゲタルコトハ頗ル有意義ナルト共ニ本校ノ大ナル使命ヲ信ジ其ノ責任ノ重且大ナルコトヲ自覺スルモノデアリマス。

感想ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シマス。

文部大臣祝辭

本日横濱高等商業學校開校ノ式典ヲ擧行スルニ當リ一言慶祝ノ意ヲ表スルコトヲ得ルハ予ノ欣幸トスル所ナリ。

抑々横濱ノ地帝都ノ關門ニ位シ開國以來世界交通ノ衝ニ當リ本邦貿易上最モ重要ナル地位ヲ占メ我國輸出入貿易總額ノ凡三分ノ一ハ實ニ本港ヲ經由ス。

政府ガ大正十二年十二月此地ニ横濱高等商業學校ヲ創設シタルハ實ニ玆ニ觀ル所アリシナリ。次デ十三年四月始メテ生徒ヲ收容シ爾來教職員諸氏ノ協力一致ト官民諸氏ノ後援トニ依リ克ク震災直後ノ困難ニ堪ヘ諸施設ノ完成ト內容ノ充實トニ努メ以テ今日アルヲ見ル邦家ノ爲寔ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ。

惟フニ國運ノ隆昌ハ國民ノ經濟的發展ニ俟ツ所極メテ大ナルモノアリ國民ノ經濟的發展ハ國民各自ノ自覺ニ依ル而モ世界ノ經濟界益々多事ナラムトスル現下ノ情勢ニ於テ自ラ實業界ニ投ゼムトスル者ハ宜ニ商業的才幹ヲ有スルヲ以テ足レリトセズ剛健質實ナル氣風ト高邁ナル人格トヲ兼ネ備ヘザルベカラズ。

本校ハ實ニ國家ノ進運ニ貢獻スベキ模範的實業家ヲ養成シ本邦產業貿易ヲ振興シ又之ニ由リテ横濱ノ復興促進ニ寄與スルノ使命ヲ帶ブルモノナルヲ以テ教職員諸君並生徒諸子其ノ責任ノ重且大ナルニ鑑ミ不屈不撓ノ精神ヲ以テ國家ガ本校ニ期待スル所ニ添ハムコトヲ切望シテ止マザルナリ。

終ニ予ハ此機會ニ於テ本校創設ニ際シ多大ノ援助ヲ與ヘラレタル本縣官民諸氏ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表シ併セテ本校將來ノ發展ヲ祈ル。一言以テ祝辭トナス。

大正十五年十月二十一日

文部大臣　岡田良平

東京商科大學長祝辭

横濱高等商業學校新設セラレ諸般ノ設備成ヲ告ゲ玆ニ本月ヲトシテ開校ノ盛典ヲ擧行セラル吾人同ジク商業教育ノ任ニ膺ル者一層慶賀ノ情ニ堪ヘザルモノアリ。

囘顧スレバ横濱ニ於ケル商業教育ハ其起原頗ル遠ク明治十五年故小野金六氏等同市々民二十有餘名ノ發起ヲ以テ創設セラレタル横濱商法學校ヲ以テ濫觴ト爲ス當時本邦ニ於ケル商業學校ハ東京商法講習所及ビ神戸大阪兩商業講習所等アリシガ神戸大阪ノ二講習所ハ內國商業取引ニ必須ナル卑近ノ技術ヲ授クルヲ以テ目的トシ其程度極メテ淺薄ナリシニ反シ横濱商法學校ハ東京商法講習所ト同ジク專ラ外國貿易ニ從事スベキ人材ヲ養成スルヲ以テ目的ト爲シ洋式教育ヲ施シ經濟貿易實務及ビ外國語ニ力ヲ用キタリ然ラバ則チ横濱創立者ノ企圖ハ外國貿易上實際ノ需用ヲ察シテ其教科ヲ擇ミ程度ヲ定メ以テ目的ヲ達成セント期スルニ在リシヤ復タ疑ヲ容レザルナリ爾來本邦經濟ノ發達外國貿易ノ進歩顯著ナルニ伴ヒ東京商法講習所ハ之ニ順應シテ漸次其教科ヲ進メ程度ヲ高メ高等商業學校トナリシニ係ラズ横濱商法學校ハ明治二十一年商業學校通則ニ據リ其第一種學校ヨリ稍高キ中等教育機關トシテ横濱商業學校ト改稱シタルニ過ギズ更ニ征清討露ノ兩役ヲ經本邦經濟ニ異常ノ進展ヲ來タシ國光大ニ發揚セラレシ機運ニ際會シ東京高等商業學校ハ益々其程度ヲ高クシ神戸大阪長崎山口小樽ノ各地ニ高等商業學校相踵テ設立セラレ本邦高等商業教育機關漸ク備ヘルニ至リシカ横濱ハ依然中等學校タル横濱商業學校ヲ有セシノミニシテ何等之ニ加フル所アラズ吾人ハ本邦外國貿易上ニ於ケル同港ノ位地歷史並ニ前記横濱商法學校創立ノ趣旨ニ鑑ミ斯ル情態ニ鬱シ不滿ノ念ナキ能ハズ又横濱市民ノ傍觀シテ何等奬策スル所ナキヲ解スル能ハズ玆ニ勇敢進取ノ氣象ヲ以テ雄視セル横濱市民ノ意氣何ク二存スルヤヲ疑ハザルヲ得サリキ然ルニ政府ハ蚤ニ歐洲大戰後ノ一施設トシテ高等教育機關擴張ヲ計畫シ名古屋彦根和歌山高松大分鹿島高岡ノ諸市ト共ニ横濱ニモ高等商業學校ヲ新設セラレタリ是レ最モ機宜ニ適シタル措置ニシテ吾人ハ本校ノ設立ニヨリテ横濱ニ當然設置セラルベカリシモノニシテ長ク闕如シタルモノノ設置ヲ見又横濱市民ノ當然有セザルベカラザリシモノヲ新ニ遡タルヲ見欣躍ノ情禁ズル能ハザルト同時ニ其設立時機ノ大ニ後レタルヲ惜マザルヲ得ザルナリ。

然レドモ既往ハ追フベカラズ要ハ將來ニ善處スルニ在リ抑々横濱ハ商業教育ニ取リ能ク地ノ利ヲ占メタリト謂フベク教官ノ招聘教材ノ蒐集國際事情ノ觀察生徒ノ募集卒業生ノ就職等他ノ多クノ地方ニ比シテ遙ニ有利ナルハ曾ヲ俟タズ而カモ當路能ク其人ヲ得創立以來日尚ホ淺キニ拘ラズ已ニ其功績ノ見ルヘキモノ頗ル多キガ故ニ吾人ハ此機ニ當リ文政當局ガ益々本校ノ施設ヲ完備スルニ勉メ横濱市民モ亦之ガ設置ニ報ユル爲メ衝テ本校ノ經營ニ利便ヲ與ヘ其傳統的ノ意氣ヲ發揮シ本校ヲシテ克ク其地ノ利ヲ善用シテ其使命ヲ完フスルニ遺憾ナカラシメンコトヲ翼フト同時ニ本校當路者ニ向ツテハ適切ニシテ穩健ナル教育方針ヲ確立シテ能ク校務ヲ經營シ內ハ以テ質實剛健ノ校風ヲ涵養シ外ハ以テ本邦產業貿易ノ振興ニ貢獻シ又横濱港ノ繁榮ニ寄與シ以テ校運ヲ長ヘニ隆昌ナラシメ天下ノ期待ニ負カサルコトヲ切望シテ已マサルナリ爰ニ祝辭ヲ省ミズ所感ヲ披瀝シテ以テ祝詞ニ代フト云爾。

大正十五年十月二十一日

東京商科大學長　佐野善作

工事報告

本日横濱高等商業學校ノ開校式ヲ擧行セラルル方リ工事施行ノ顚末ヲ報告スルハ小官ノ光榮トスルトコロナリ。

蚤ニ政府ハ大正八年度以降ノ繼續事業トシテ高等諸學校ノ增設ヲ企畫セラレ就中高等商業學校ハ全國ニ七校ヲ新設シ其一校ヲ横濱市ニ設置スルコトトシ豫算額ハ八十三萬三千百圓ト決定セラレタリ依テ神奈川縣ヨリ五十六萬圓ノ寄附ヲ申請許可セラレ敷地ノ購入及地平均工事ハ之ヲ同縣ニ委任シ其完了ヲ俟ツテ大正十三年四月文部省建築課横濱出張所ヲ開設シ專ラ工事ノ設計監督ニ從事セリ。

元來本校ノ建築ハ木造ノ計畫ナリシモ震災ノ結果耐震耐火的構造ト爲スベキ必要ヲ認メタルヲ以テ主要建物ハ之ヲ鐵筋混凝土造ニ變更シ其ノ變更ト物價騰貴及土地購入增價等ノタメ實行豫算額ヲ設備費ヲ合セテ百十一萬六百九十一圓ト改定セラレタリ而シテ其設計ハ實用ヲ旨トシ裝飾的設計ハ成ルベク之ヲ避ケ指名競爭入札ニヨリ請負ニ付シ工事ヲ實行シ寄宿舍兩天體操場等ヲ除ク外ハ既ニ其ノ竣工ヲ告ゲタリ。

買收セシ敷地面積ハ一萬八千二百四十八坪餘ニシテ其ノ購入費十九萬五千四百四圓ヲ要シ此一坪當リ十圓七十錢餘ニシテ地平均ハ一萬二千六百二十七圓ヲ要シタリ又竣工セシ建物ノ總延坪ハ二千二百五坪餘ニシテ今日迄ニ支拂及契約濟ノ工費ハ五十七萬六千五十五圓餘ニシテ本館鐵筋混凝土建延一坪當工費ハ二百四十二圓餘ニ相當セリ又器具機械圖書類ハ本校ニ於テ之ヲ設

備セリ

本工事着手以來前後三ヶ年ニ亙リ何等ノ故障ヲ生セズ其工程ヲ遂メ近ク全部ノ完了ヲ告ゲントスルニ至リタルハ閣下並諸君ノ後援ニ倚ルニ外ナラザルコト深ク感謝ノ意ヲ表シ茲ニ工事施行ノ概要ヲ報告ス

大正十五年十月二十一日

文部大臣官房建築課長

文部技師　柴垣鼎太郎

開校記念祭プログラム

十月二十一日（木）（1）式　典　午前十時——正午

（2）東電對本校野球戰　於本校グラウンド　午後二時より

（3）提灯行列　本校生徒全部　午後六時より

（道順）本校—初音町停留所—電車道—長島町—吉田橋—馬車道—大江橋—櫻木町驛前—弁天橋—本町通リ—相生町—公園にて解散

二十二日（金）名士學術講演會（本校大講堂）　午後一時より

一、爲替市場としての横濱　横濱正金銀行頭取　兒玉雅次氏

一、富の經濟と貧の經濟　法學博士　福田徳三氏

二十三日（土）運動會　於本校々庭　午前九時より

個人競技、ＨＣＳ學年對抗競技、縣下中等學校八百米リレー、市内小學校高等科八百米リレー、同尋常科四百米リレー、來賓競爭、優勝旗授與

二十四日（日）（1）近縣中等學校軟式庭球大會（本校コート）午前八時より參加學校七十餘校

（2）硬式模範試合（鴨打、河尻、藏生、八木、相澤）　於本校コート　午後三時より

（3）一高、横濱高工、早大フレッシニマン、本校、野球爭覇戰　午前八時より

（4）近縣中等學校柔道大會　本校道場　午前九時より

神奈川、靜岡、千葉、埼玉、東京、山梨、各府縣十八校

（5）全關東卓球個人大會及女子模範試合　午前九時より

參加者　二百餘名

（6）縣下中等學校バスケットボール大會　午前九時より

神中、二中、三中、關東學院、本牧中、鎌倉師範

（7）音樂大會　於本校大講堂　午後六時より

一、合唱　校歌　本校音樂部員

一、笛絃樂　陸軍戸山學校軍樂隊

一、序樂祝典　ラタン作

二、未完成シンフォニイ　シューベルト作

一、合唱　祝歌　本校音樂部作

一、マンドリン合奏　本校音樂部員

一、合唱　船出　本校音樂部員

一、マンドリン合奏　本校音樂部員

一、笛絃樂　陸軍戸山學校軍樂隊

一、二つの印度舞曲　スキルトン作
二、木琴獨奏　デトリツヒ作
三、スラブノ詩史　フリードマン作
管絃樂指揮　平野主水氏
合唱指揮　青木兒氏
マンドリン合奏指揮　逸名

二十五日（月）（1）神中對横商野球戰　於本校グラウンド　午前八時より
（2）辯論大會　於本校大講堂　午後一時より
一、移民か移物か　宮島信一
一、婦人勞働と家庭貨銀　西野已男司
一、國民外交の基調　伊東遊作
一、帝國の前途と海運　鈴木三樹三
一、石油を繞る各國の動き　深澤多喜男
一、最近の支那　白崎豐
一、爲替問題考察　多村秀一
一、保守主義の一考察　市川泰次郎
（3）巢龍會主催　琴古流尺八演奏會　於本校講堂　午後五時より

二十六日（火）（1）縣下中等學校英語大會　於本校講堂　午後二時より
（2）外語劇及朗讀　於本校大講堂　午後六時より
（イ）英語―アブラハム・リンガーン（ドリンクウオーター作）
（ロ）同　―スレツド・オブ・スカーレット　（ベル作）
（ハ）獨逸語―思ひ出　（フエルスター作）
（ニ）佛語―辭官　（マーテルリンク作）
（ホ）支那語―辭去來之朗讀

二十七日（水）縣演部巡回辯演（縣下及靜岡方面）

三十一日（日）（1）縣下各クラブ蹴球大會　於本校コート　午前八時より
白旗、セント・ジョセフ、横濱サッカー、海兵團、本校各クラブ
（2）縣下劍道大會　於本校道場　午前八時より
逗中、神中、二中、三中、横商、實習、工業、鎌中、鎌師、本牧中、横須賀中

二十一日より二十六日まで
校内開放　室内裝飾
横濱文化史料展覽會
神奈川縣下學生寫眞印畫展覽會
ポスター展覽會

横濱文化史料展覽會　記念式典當日、調査部編纂の「横濱の沿革」なる小冊子を來會者に贈呈し、横濱の今昔概觀を示した（内容　一、横濱の開港と發展　二、泰西文物輸入港としての横濱　三、横濱沿革誌略）が、記念行事の一として、調査部主催の横濱文化史料展覽會を開き、横濱市史編纂係その他の資料蒐集家から、古地圖、錦繪、寫眞、古書籍、諸參考品等を借受け、これに調査部所藏の錦繪、關係文献を加へ、出品目錄を作つて頒ち

出品點數百三十七を一週間に亙り展示し、來會者の多大なる興趣を惹いた。

開校記念論文集刊行　「商學」創刊に先立つこと二年半、季報發行より一年半前の昭和二年三月十日に、開校記念論文集が次の如き内容を以て刊行された（菊版四二五頁）。これは本校の處女出版であり、將來の機關誌刊行の原型となつたものである。卷頭に載せられた田尻校長の發刊の辭はその抱負を語つてゐる。

發刊の辭

本校開校記念事業の一として豫て企劃せられてゐた本校スタッフの商業學經濟學法律學に關する研究論文が上梓刊行せらるるに當つて一言發刊の辭を寄せんとする。

抑々吾々は教育者であると共に學徒でなければならない。學生の教導に當ると共に學問研究に眞摯の努力を拂はねばならぬ。而して其研鑽の結果は之を世に發表して江湖の批判を乞ふ事は寔に自己琢磨の道でより能て學問の向上進歩に資する所以であらう。吾々は夙に創立の際から此志を懐いては居たが創立事業の多忙の爲めに今日まで其意を果さなかつた。然るに創業の仕事も一期を劃し開校式を擧ぐるに際して機會到來し吾々の初志は遂せられたのである。

憶ふにスタッフ各自は日頃其專門とする道を選んで學問的生命をここに捧げ、自己の個性を發揚して學的生活を營んでゐる。然かも各〻の發き出す音色は異るけれども合しては一の全き旋律を持つ交響樂を完成する如く各自の學問的興味が玆に集成せられて一の論文集となつてこそ學校を中軸とする吾々の協同生活が完きを得るのである。

吾々は今昭和の初頭に無限に擴大し行くべき旋律の交響樂を江湖に向つて奏でんとする。日新の意氣と不斷の創造的努力懸て學界に雄飛すべき礎石は置かれたのである。

目次

原價計算に關する考察若干　小宮山敬保
德川時代に於ける堂島米市場　井上龜三
商品と工業所有權　南和康博
商工業に於ける人的因素　内山逸
收益率の理論　井上螢三
ゲヨールラントの「奢侈の概念」に就て　波邊輝一
チュルゴーの思想の一解釋　德增榮太郎
獨逸の賠償問題　岡野鋹記
ベルヌイの定理と大數法則（ボルトキウイッチ）　森田優三
獨逸法に於ける物の賣買と契約不履行　不二門龍觀
英商法の特質と由來とに就て　大竹線
勝　渙
爲替市場としての横濱　横濱正金銀行頭取　兒玉雖次

開校式當時の概況

一、職員

學校長　田尻常雄

教授

保險學、交通論　岩本啓治

國語、漢文、世界近世史　栗林宙朗

（在外研究中）　下田穗佐

（在外研究中）　西村稠

簿記、原價計算　古館市太郎

不二門龍覰	法學通論、民法、商事關係法
藤田義雄	商業作文、書法、商業實踐
光井武八郎	英　語
內山進	修身、商工心理學、心理學
河村重治郎	英　語
小宮山敬保	簿記、會計學
德增榮太郎	經濟原論、商業史
時田清	佛蘭西語
大竹綠	民法、商法、國際法
渡邊輝一	商業政策、交通論、商業英語
小幡孫二	商業算術、數學
陸軍步兵少佐 宮城善助	配屬將校
	助教授
下津屋俊夫	體操
	講師
石川寬	體操、教練
山崎與右衞門	珠算
東京高師教授 友枝高彥	修身
東京高師教授 內田寬一	商業地理
井上鐵三	商業通論、貨幣論、商工經營

森田俊三	銀行論、外國爲替、統計學
小谷惠一郎	獨逸語
井上龜三	商業英語、我關倉庫
武田武雄	支那語
田尻彥幸	理化學
南雲康博	商品學、工學
岡野鐵記	財政學、工業政策
	佛外國人教師
エー・ビー・ウンズ	英語、商業實踐、英文錄記
伊藤子之吉	柔道教師
吉川仲衞門	劍道教師
	書　記
齋藤照之助	會計課
矢島熙	庶務課
武石彌平	教務課
堤善吉	會計課
	事務囑託
湯川和平	圖書課
吉居德治	屬　員
三田村鎭夫	會計課
	同

教務課	湯川貢藏
圖書課	長田兵弐
生徒課	吉川仲衛門
圖書課	増田彌之助
調査部	山崎哦
運轉手	植岡金次郎
守衛	櫻井已之吉
會計課	小川ゆき

校醫

事務分掌	久賀六郎
教務課主任	教授古館市太郎
生徒課主任	生徒監教授岩本啓治
庶務課主任	同藤田義雄
會計課主任	書記矢島熙
圖書課主任（在外研究中）	書記齋藤照之助
副主任	教授下田禮佐
商品課主任	同渡邊輝一
調査部長	講師南種康博
	教授德増榮太郎

職員及傭人表

（大正十五年九月十五日現在）

	定員	現員（在外研究中ノ者ヲ含ム）
校長	一	一
教授	二〇	一七
助教授	七	二
書記	六	四
講師		一
傭外國人		二
柔劍道教師		二
配屬將校		一
囑託		一
事務雇員		一
守衛		四
給仕		四
定夫		二
小使		八
計	三四	七〇

二、生徒

生徒數

（大正十五年九月十五日現在）

出身別	第一學年	第二學年	第三學年	計
中學出身	一〇一	八九	七四	二六四
商業出身	五九	五〇	四八	一五七
計	一六〇	一三九	一二二	四二一

入學志願者及入學者ノ累年比較表

募集年次 ＼ 種別	入學志願者			入學者		
	中學	商業	計	中學	商業	計
大正十三年度	七三八	二九〇	一、〇二八	八四	五〇	一三四
大正十四年度	七四九	三九四	一、一四三	一〇二	五二	一五四
大正十五年度	六一一	三三六	九四七	九四	五七	一五一

生徒原籍調　（大正十五年九月十五日現在）

本籍	生徒數	本籍	生徒數	本籍	生徒數
北海道	八	栃木	一五	香川	三
東京	四〇	奈良	一	德島	三
京都	一〇	三重	一三	秋田	三
大阪	八	愛知	一二	福井	一〇
神奈川	七	静岡	二二	石川	八
兵庫	一三	山梨	六	富山	一〇
長崎	一〇	滋賀	二	鳥取	二
新潟	九	岐阜	八	島根	三
埼玉	八	長野	一三	岡山	五
群馬	六	宮城	三	廣島	九
千葉	九	福島	五	山口	五
茨城	一〇	岩手	六	和歌山	一
高知	三	愛媛	一	福岡	一四
佐賀	五	長崎	一	熊本	一〇
宮崎	二	鹿兒島	七	沖繩	一
計	一四二				

三、研究資料

圖書及雜誌　（大正十五年九月十五日現在）

圖書	冊數	雜誌	種類
和漢書	三、一九三冊	和雜誌	六〇種
洋書	四、四九八冊	洋雜誌	六四種
計	七、六九一冊	計	一二四種

調査部保管資料　（大正十五年九月十五日現在）

一、官公署銀行會社諸團體公刊資料パンフレット類……約六五〇部

二、同　上……定期刊行物……（內國……一八〇種　外國……三〇種）

三、新聞記事切抜……內國新聞……八種

四、銀行會社考課狀……（內國……五八〇社　外國……一五社）

商品標本及機械　（大正十五年九月十五日現在）

種別	點數	單價	格
商品標本	一〇五五	一	五、五〇〇圓
機械器具	一〇三〇	一	一九、五〇〇圓

六　學友會の活動

文化團體　學友會は大正十三年開校匆々結成されたけれども、間借生活の不如意と、百三十ばかりの一年生の少數であつたためにこれといふ活動は出來なかつた。ただ特筆すべきは一年有志の間に國際聯盟協會の學生支部が夙くも結成され、十一月二十二日、本校講堂でその發會式が擧げられ、財務官森賢吾氏の「歐米財政事情」早大敎授內ケ崎作三郎氏の「國家人と國際人との調和」と題する講演があつた。これは學友會の外郭團體ではあつたが、學友會的な活動としてのトツプを切つたものであつた。爾來二十年、國際經濟研究會として大きな足跡を殘しつつ今日に至るまでこの外郭團體は存續して、國際經濟問題への關心を昂揚してゐるが、日本國際協會（現外政協會）に於ける學生支部としては最古參格である。

この國際經濟研究會は翌十四年一月三十一日に第二回講演會を開催、新渡戸稻造、林毅陸兩博士の講演を、五月廿二日には、第一回國際思想研究講座を開き、外務省の塚本毅氏の講演を聽くといふ如く、文化方面活動の中心をなしてゐた。

學友會講演部は十四年五月三十日その第一回名士講演會を開き、高谷道男氏の「神秘思想の一考察」、堀光龜氏の「太平洋問題」を聽いた。

運動部は十四年に入るや高工野球部との間に定期戰を毎年一回交へようとの議が熟し、開港記念祝賀行事の一つとして、七月二日の開港記念日（後六月二日となる）に決行することとし、第一回定期戰が十四年七月二日、全校應援の下に、新山下町假設グランドで行はれた。午後四時開始、七時閉戰といふ記錄が殘つてゐるが隨分長試合だつた。その結果は四A對三で本校が惜敗した。

翌十五年の第二回戰は七月一日新山下町グランドに擧行、五對四で本校が勝つた。應援に秘術を盡し、扇子による手拍子、拍手や太鼓で氣勢を上げ、應援戰の觀があつた。兩校應援團の熱狂、兩校ファンの喧騷、遂に橫濱名物の一つとなり「濱の早慶戰」と謳はれるに至つた。第三回も新山下町グランドで昭和二年七月一日に行はれたが、本校は一對〇で惜敗した。第三回は諒闇中であつたから太鼓その他の鳴物入り應援はなかつた。第四回は翌三年七月一日擧行四對三で本校快勝。第四回の決戰場は瀧頭球場（現在大日本航空會社のある場所）であつたが、塵芥燒却場が近くにあり、市中から集められた生の塵芥が近くに積んであつたから眞夏の蠅が風に乘つて大擧して觀覽席へ飛んで來る。これを追ひ拂ふ扇子が一時に動いて白扇の浪が押し寄せるやうな壯觀を呈する等の景物もあつた。

もともと定期戰の目的が、兩校の技術を磨くとともに親睦を圖らうといふにあつたが、兩校とも學校の面目に掛けても勝たうと張切るし、鳴物入の應援團が背後に控えてゐるし、否應援團同志の競爭が展開する。これにそれぞれのファンが彌次の應酬をするので、試合が了つても興奮が醒めず、夜の伊勢佐木町まで延長戰が繰り展げられるといふ有樣だつた。電車の中で毎朝毎夕顏を合せる兩校の學生が、敗けた方は當分銷沈して顏も上げられないといふやうな拘泥は甚だ面白くないし、定期戰の逆効果である。このことと、試合を實力本位でやるために三回戰にしたいといふ本校側の主張と一本勝負で行かうといふ高工側の主張が妥協點に達せず、定期戰は此の第四回を以て一時中止することとなり、昭和四年五年の二ケ年は定期戰が見られなくなつた。

第一回陸上運動會が、十四年十一月十五日校庭に開かれた。陸上競技に餘興を織込んだやうな運動會で、前垂掛の店員や墨染の坊さん等に假裝して見物人に混つてゐる學生を、見物人に捜し當てさせる等といふ景物が添へられ面白可笑しく秋の一日を過ごさうといふ趣向である。

第二回は翌十五年十月二十三日に開催され、學年對抗で優勝した組及び近縣中等學校、市內小學校の對校リレー競走に優勝旗を渡すこととなつた。

昭和二年七月二十三日駒場帝大グランドに於ける全國高專野球大會關東豫選大會に、野球部は準決勝戰で再度

高工と對戰し一對〇で惜敗してゐる。明治、慶應各豫科と本校との優勝爭奪戰といふ戰前の下馬評は裏切られた。

體育各部も對高工定期戰にその他對校競技と試合に活躍して部史の初めを飾つてゐる。

下津屋助教授の指導で體育研究會が成立し會員三十五名を擁した相談會に發足したのが昭和二年六月二十七日であるが、下津屋氏がその席上語られた大きな抱負は、その後の體研の發展を約束するものの如くである。即ち「獨逸の愛國者がナポレオンの暴虐から脫せんとして奮起し、祖國青年の精神作興は體育の向上にありとして獨逸體操を創始した。又フヰンランドの奪取されたのを歎いて憤起せるスウエーデンの熱血詩人によつてスウエーデン體操が發明された。かくて現代世界における體育の二大形式たるドイツ及スウエーデン體操は愛國の士によつて起されたのである。我國の文部省はこれ等諸國の體操の長所を採り入れ我國在來の體育方法をも尊重してここに今日の體育形態が出來た。ただ現今の青年は娯樂とか名譽心とかいふ出發點からは、かなり體育をやつてゐるが、もう少し眞の意味の體育を重視しなければならぬ云々」と。本校の體育は後述する如く全國有數のものであつて早くも文部省の表彰を受けたが、敎官のこの抱負、この熱意あればこそで洵に故ありといふべきである。

横濱高商新聞發刊　昭和二年新學期を迎へ第二回生が三學年生となるや、新聞發行の希望が起つた。「新聞は目下の急務だ。學生相互の親睦も新聞を通してであり、先生と學生との意見の疎通も新聞に依るの効は大である。本校發展のために我々の意のあるところを解せられたい」と發起人の三年生は全學生に呼びかけた。基金の點で杜撰の點があり、多少の迂餘曲折はあつたが、學友會誌年二回發行を一回として他の一回分の費用を新聞發行に充てることに決定して折合がついた。ただ高商校長會議で新聞發刊禁止の內訓があつた際だつたから校長のところで難色があつたが、學生の誠意が通じ、自重と責任とを以て發行の事に當る旨を誓はしめて遂に發行が許された。發行兼編輯人は三年坂本四郎君が當り、横濱毎朝新報社で印刷した第一號は二年六月三十日、新聞半折大八頁で發刊された。一面は發刊の辭と發刊に至る經緯。二面は論說ウイリアムゴドウイン で全紙幅が埋められ、三面は學校の近況で、下田敎授齒朝、渡邊敎授渡歐が報道されてゐる。四面は文藝欄、五面は迫り來れる第三回對高工定期野球戰への激勵で飾られ、六、七面は學友會各部の活動狀況が載せられてゐる。八面は全面殆んど廣告に充ててゐるがこれは經費捻出の爲めであつたらう。

第四號までは「横濱高商新聞」であつたが、十一月廿五日發行の第五號から校長揮毫の「横濱高商學報」と改題。四年第十四號から四頁新聞大となつた。三年には雜誌部が學報部と改められ學友會誌一回（學友會誌は六年の十月から不二見ケ丘と改題）、學報年八回發行することとなつた。

その頃の學友會　昭和二年、籠球部が學友會の部として認められ、卓球部が庭球部から獨立し、競技部の內に水泳を含むこととなつた。

翌三年學友會の基礎を確立するため基金として三百圓を積立て爾後毎年之を繼續することとした。四年經費不足を補ふため會費を年額十一圓とした。又御大典記念事業として椎三十七本を校庭に植える。五年度から弓道と

體育研究會に學友會より補助金提出。弓道場が校庭南隅に設置された。弓道部は六年に獨立する。七年ラグビー部、九年排球部が獨立する。運動各部の更衣所が體育館西側に添ひて新設されたのは八年である。

五年對商大專門部との定期綜合競技會を開くことになり優勝旗を作製した。第一回は六月廿九日國立の商大グランドで行はれ、本校側は、野球、柔道、劍道、蹴球の四種目に勝ち、陸上競技、籠球、水泳、弓道の四種目に敗れて同點となり、勝敗の鍵は翌三十日の庭球戰が握ることになつたが、果然非常な接戰となり遂に專門部を倒して勝ち、綜合成績九種目中五點を擧げて優勝した。第二回は翌六年六月二十八日本校校庭で展開。本校は九種目中、劍道、柔道、陸上競技、野球、蹴球、水泳に勝ち、籠球、庭球、弓道に敗れたが綜合點六對三で連續優勝した。對一橋專門部定期競技會は僅かに二回で中止し、豪華絢爛たる優勝旗は、兩校學生の手によつて七年、六鄕河畔で燒却された。

文化方面では、開校當初から實力を備へた語學部が毎年秋の開校記念祭行事に外語劇を開いて樣々の人氣を浚つてゐたが、昭和五年十一月二十二日午後五時半から講堂で擧行された外語劇は、先づ西村敎授の開會の挨拶に始り、佛語劇ユーゴーの「ジャン　ヴアルジャン」、英語劇「酒場の夜」支那語劇長與善郎原作「韓信の死」（原作者長與氏が當夜わざわざ觀賞に來られてゐた）、西班牙語の演說、獨逸語劇「アルト　ハイデルベルヒ」が上演された。六年は西語劇「罪は若きにあり」獨語劇「ウイリアム　テル」佛語劇「アルルの女」英語劇「息子」華語劇「鴻門之會」を上演、每回學生の熱演に觀衆を魅了し去り盛會を極めつつ最近まで續いてゐる。

七　貿易別科創設

貿易別科創設の事由　不況は人口過剩現象として現はれる。この內地の過剩人口を海外へ移植させ、かねて國威伸展を圖らうとする拓殖計畫が政府によつて執り上げられ、その移植民の現地指導者を養成する敎育機關を本校と長崎、山口の三高商に附設することとなり、昭和四年四月、長崎、山口兩校に支那貿易科、本校に南米貿易科が開設された。

この貿易別科は修業年限一ケ年、この短期間に南米移住並に南米貿易に必要な學科を敎授し、卒業後は直ちに南米に移住させるか或は南米貿易に從事せしむる方針である。

南米は新興國多く、地域廣大で資源豐富だから將來我國の有望なる輸出市場であり、日本人移住の好適地である。のみならず勞力の不足を補ふために入植者を歡迎してゐたから、政府が南米貿易科を本校に附設したことは商權擴張の點からも人口問題解決の手段としても誠に時宜を得たものであつた。

南米の天地で活動する人材養成といふのだから別科の學科目は自ら異色があり、特に著しい點は、スペイン語（又はポルトガル語）を第一外國語とし、每週九時間を課し、英、佛語等を第二外國語としたこと及び農業大意と農業實習とが課せられてゐることである。

學科目及每週教授時數

學科目＼學期	第一學期	第二學期
修身	一	一
商業通論	二	二
簿記	三	三
南米經濟事情	四	四
貿易大意及外國爲替	二	二
貿易實踐タイプライティング	二	二
經濟大意	二	二
農業大意	三	三
移植民論	一	一
國際法	一	一
スペイン語	九	九
英語	三	三
體操	二	二
農業實習	毎週二回以上	
合計	三五 外ニ實習時間	三五

入學資格は一般專門學校と同一である。

定員三十名に對する第一回受驗者は二四〇名で、四年四月二十七、八日に入學試驗を行ひ三十九名の入學を許可した。

これ等別科生の生徒としての取扱は全く本科生と同一であつて、教官もスペイン語と農業大意の教官以外はすべて本科の教官が出講することとなつてゐる。

南米に橫濱高商村建設の意氣　四年四月入學した別科生中三十四名が一ケ年後の五年三月卒業したが、その內の十五名は遠く南米ブラジルに渡航入植して橫濱高商村を建設し新天地を開拓して今後の入植者の先驅ともなり廣漠たる南米の原野で活躍すべく五月下旬相率ゐて壯擧に赴つた。これ等の一行はブラジル國サンパウロ洲プラサツパ郡アリアンサ植民地に在る力行會の農事練習所に入り、四五年の實際經驗を積んだ上、附近の日本人農場の分讓を受けて自作農を經營し、すべて相當な地主として大農經營をなしてゐるものもあつたし、都會へ出て商業を營んでゐるものもあつた。さうして引續いて渡航入植した別科卒業生と協力して所期の目的に邁進してゐた。

八　開校五周年（昭和四年）前後

教官の動靜　開校間もなき大正十四年三月には下田教授が在外研究員として渡歐、續いて西村教授が出發したが、昭和二年五月下田教授歸朝と入れ替りに同月、渡邊教授が渡歐し、三年四月には光井教授が英國へ向け出發した。四年三月になると井上龜三教授が獨逸へ出發した。井上教授は大正十三年開校當時講師として經濟學を講述してゐたがその年の冬、近衞聯隊へ入隊のため一旦辭任、除隊後再び教授として歸つて來られたのである

が、ここに留學の日が來たのである。光井教授は五年六月歸朝。

井上龜三教授が六年六月歸朝するや九月には井上鎧三教授が渡歐した。井上鎧三教授は九年五月歸朝したが、文部省の在外研究員規程が變更窮屈となり、留學の順に當つてゐた森田教授は十二年まで待たねばならなかつた。

これより先、大正十五年七、八月商工農の專門學校教授十二名から成る實業教育視察團が、滿支方面の教育狀況視察に出かけたが、田尻校長はその團長として、一行を率ゐて七月廿五日橫濱發九月四日橫濱歸着まで一ケ月餘に亙り滿支各方面視察を遂げた。この行には支那語教官武田武雄講師が同道し現地見學と同時に通譯の勞をとつた。

昭和四年十一月末には、田尻校長、浦鹽經由で學事視察のため渡歐、獨逸で井上教授、イギリスで光井教授と邂逅、歐米各地を巡遊視察して五年十月二十日に歸朝された。

四年五月には德增教授が全國經濟調査機關聯合會の鮮滿產業視察團に加はり、約一ケ月朝鮮滿洲を視察した。七年に同じやうな視察團で井上龜三教授が鮮滿を旅行した。

貿易別科新設に伴ひ中南米の實際事情を現地に視察調査する必要は夙くから痛感されてゐたが、七年に至つてその希望が實現し、下田教授は七月九日出發、十二月初旬まで滿五ケ月間中南米の現地研究を遂げて歸朝した。果然本校に於ける中南米認識は深められ、別科卒業生の渡航希望を高めた。

國際オリンピック大會が七年夏、ロスアンジェルスで開催されたが、日本體育界に重きをなす下津屋助教授は體操監督として羅府へ派遣されることとなり、六月三十日橫濱を出帆してオリンピックの檜舞臺に選手の活躍を指導監督した。いま同教授が體育の時間に着てゐる胸部に日章旗をつけた紺色の運動着こそ其の時の記念の啃着である。

應召出征の職員生徒　昭和三年五月濟南事件起り、在留邦人約百名が南軍に慘殺されたので五月八日第三次山東出兵となつた。名古屋第三師團に動員令が下り、本校に於ても團稽課の增田彌之助氏が豫備陸軍三等主計として召集直ちに濟南へ出發、三年生長野芳朗、二年生三浦銕一、一年生鈴木富雄の三君が應召した。

六年の滿洲事變には卒業生にも本校にも直接の影響はなかつたが、八年に至り第六回卒業の宮川保君が北滿共匪討伐中に名譽の戰死を遂げ、本校卒業生最初の戰死者を出した。

野外教練と査閱　野外演習と呼ばれた野外教練は大正十四年十二月四、五日商工を假設敵として戸塚藤澤間に行はれたのが抑々の始めで、配屬將校宮城善助少佐が統率した。第一日の四日午前八時四十分本校出發戸塚方面へ進擊、同夜は戸塚附近に宿泊、翌日午後二時歸校した。校庭に於て閱兵式擧行。廣瀨第一旅團長、伊藤第四十九聯隊長、橫濱憲兵分隊長等列席。廣瀨旅團長、宮城少佐の講評、田尻校長の訓辭があり萬歲三唱して解散した。爾來毎年野外教練を擧行、或は箱根に或は一の宮に或は富士の裾野に二、三泊の嚴格なる軍隊的生活を送らせた。校長始め教官が交替で同行監督見學に當つた。さうして毎秋第一旅團長の査閱を受けたが昭和七年には、畏

くも朝香宮殿下が第一旅團長として台臨、十一月十七日査閲下調、十二月十五日査閲を賜はられた。

校歌成る　大正十五年開校式擧行の時にも暫行的な校歌があつた。作詞者は判らないし果して合唱されたかどうかも、いま記憶されてゐないが、歌詞は次の通りである。

校　歌（暫行）

一、紅の光の朝汐に　寄せし黒船夢破り
港開きて千歳の　榮いやません横濱に
立つはふさはし見よわれの　高等商業學校を

二、富士見丘の三階の　高樓はるか見渡せば
空を涵して四つの海　めぐる潮ぞ心地よき
後は箱根の連山と　八朶芙蓉の峰の影

三、林の如く帆檣の　並ぶや富の象徴と
勇み希望の豊かなる　儲兒幾百一國の
励み日夜にたゆまんや　想は廣し海ととも

四、あゝあゝ亜細亜最大の　大陸それのさきがけの
邦の若き子弟奈　理想は高しまた遠く
見ずや世界の厚生と　利用につづく我が使命

この暫行校歌が用ひられなかつたのは、恐らく歌詞が校歌として不十分であつたためであらう。その後、昭和二年頃、學生に校歌の募集をしたけれども、物にならず、昭和四年開校五周年が巡り來るので、御大典奉祝歌の作者として文名の高かつた正宮汪洋氏に歌詞をたのみ、山田耕筰氏に作曲を煩はして出來たのが現在の校歌である。四年十月完成。

校　歌

一、氣高く清き富士が嶺よ
富士見が丘のますらをよ
明るく晴れし大空の
廣き心に雄々しくも
立てるは山よわれわれよ

二、黒雲ひくくまよふとも
海原いたく荒ぶとも
鍛へし腕や世を蓋ふ
強き氣をもてしるべぞと
示すは旗よわれわれよ

三、ああ横濱に寄せかへる

文化の潮に乘り出でて
他國の岸をうち洗ひ
わがなす事業に驚けと
躍るは濟よわれわれよ

四、おゝ眉あげて唱はまし
雄圖は心に智慧包む
まことの愛に微笑みて
行く行くところ野に市に
薫るは花よわれわれよ

開校五周年記念祭　當時不況の眞只中にあつたので緊縮一點張りの五周年記念祭は四年十月二十一日の開校記念日を中心として擧行された。

その勞頭にはすでに寮生を容れてゐた寄宿寮の寮祭が十月十七日に開かれ、（第一回寮祭は三年十月十七日に擧行）各室の飾付は寮生の智慧を絞つて趣向がこらされ、二十日大運動會、十九、二十、二十一の三日間寫眞展覽會、二十二日記念講演會一日銀副總裁深井英伍氏の「金解禁と其準備」慶大教授小泉信三氏の「マルクシズムとボルシエヴイズム批判」、二十六日近縣中等學校陸上競技會と同柔道大會、十一月三日庭球大會、九日體育會と音樂會、十日近縣中等學校劍道大會、十七日全關東學生卓球大會等が催され、二十三日に外語劇を以て終了したが、平年以上に特別の行事はなかつた。

消費組合設置　教職員及び生徒の共益を目的としその消費經濟の合理化を計らんために井上鎧三教授の指導の下に組織されたもので、昭和五年に設置された。生徒が理事として、教官組合長の監督の下に業務の執行に當り勞働奉仕である。

資本金は、組合員たる教職員が就任し生徒が入學した際に金三圓を出資して活用し、退會卒業の際出資金を返戻する。

事業として、書籍文房具その他の學用品の販賣、食堂の管理等をなし、設立以來原價主義を採用し、且つ市内相模屋百貨店と六分引（後、越前屋と八分引）丸善と五分引の特約販賣を受けてゐたが、昭和十七年四月以降は書籍の定價賣りが書籍組合の厳守するところとなり又市内商店の割引販賣の特點もなくなり自ら市價販賣となつた。現在は報國團生活部購買班となつてゐるが詳細は後述する。

對高工野球定期戰の復活　兩校の主張、三回戰か一回戰かの主張が相容れずに、四、五の二ケ年は中絶してゐたが、これはたしかに横濱球界にとつて遺憾のことであり六年に到つて、三回戰による定期戰が復活して俄然兩校の選手は勿論應援團は緊張し横濱球界は色めき立つた。「濱の早慶戰」であり、最も人氣のある對校試合だつ

たからだ。

本校は前年の五年左怪腕投手荒木八郎の入學によつて一段と強味を增し、五年度全國高專大會の覇者四高を迎へて三對二で退け、更に、有名な小川、佐藤、三原、夫馬の巨姿を抱へた早大新人軍と一戰を交へたが、荒木のカーヴとドロップに早大の健棒も全く手が出せず、三振十三を喰ひ安打僅かに三本を散發したのみで、五A對一で本校のために敗退した。その他帝大とは十五對五の大差で勝ち、中央大學專修大學に對しては新人を配して對戰しながら大きな差を以て退けてゐる等壁目の活躍振りであつた。

二勝二敗の後を受けた復活第五回定期戰は六年五月三十一日その第一回戰を公園球場で交へた。宮崎照見の中堅芝生席に叩き込んだ大本壘打等安打十二を數へ、十二A對五で本校が第一回戰を獲得、第二回戰は開港記念日に擧行、これまた六對三で本校勝ち、かくて復活第五回戰はストレートで本校の勝つところとなつた。

感活定期戰のすばらしい人氣は、入場券が僅かに壹出後十八分間で賣盡したことや前賣券がプレミアム付で賣買されたこと等で十分覗はれる。それだけに試合終了のエール「ハイザー商工」と「フレー商商」が涙を以て應酬される悲愴の場面を展開する。

翌七年も八年も本校が優勝し三年連覇といふ輝しい戰績を殘した。八年にはマイクロフオンがネツト裏に据えられ、當時野球放送の第一人者松內則三氏によつて、この定期戰の實況が放送された。

因に復活第一定期戰のすばらしい人氣は次の入場者數及び入場料總收入の記錄によつて瞭かである。

第一日	入場者總數	一萬五千百六名
第二日	同	一萬六千六百九十二名
合計		三萬一千七百九十八名
總收入額		八千三百五十九圓六十錢

九 就職狀況

不況の深化　本校は大正十三年四月に開校し昭和二年三月に第一回卒業生百十七名を出したのであるが、大正末期は九年恐慌以來の不況が續いてをり、關東大震災の打擊で、弱り目に祟り目の經濟界に始めての卒業生が出て行くのだから、本校としてはその就職については頗る心を痛めた。ゆれども就職運動については十分自信のある田尻校長の獻身的斡旋の甲斐があつて、先きにも述べた如く採用申込員數は就職希望者の二・七八倍、卒業までに十二名を殘して就職が決定した。先づ當時の狀勢から言つて最上の成績だつたといつてよく、滑し出しは上々であつた。

然るに不況は漸次深刻になる。昭和二年三月には東京渡邊銀行の破綻を動機として、四月二十一日には十五銀行が突如休業し、金融界一角の崩壞を動機として金融恐慌は全國に波及し四月より九月に至る四ケ月で休業せる銀行總數三十七行に上つた。四年七月には井上藏相が金解禁を敢行して、株式は慘落、濱口內閣は緊縮實行豫算

を決定。この時に恰も紐育株式市場の恐慌に端を發した世界的恐慌は、我國の經濟界にも甚しい影響を及ぼし、五年に入るや、金の流出、輸出貿易の不振、物價低落、金利低下等となつて現はれ、一般事業界の不振はいよいその深刻の度を加へて行つた。更に六年九月には滿洲事變勃發して大陸に於ける市場を喪失するといふ狀態で、四年から七年頃に至る時代は方に不況の最も深刻化した時であつて生活難失業苦の聲は巷間に滿ち溢れてゐた。當時文部省の統計に表はれた諸學校の就職率は僅かに平均三、四割に過ぎず、卒業生の就職の機會は塞がれ思想險惡の重大原因をなした。

就職難時代　卒業期の學生が就職に心を奪はれる狀態は實に同情の限りである。二年十月二十三日附の「橫濱商商新聞」（第四號）の社說には早くも「就職難」の見出しで學生の關心の大きいことを示してゐる。五年四月二十五日付「高商學報」（第二十三號）の二面には「就職戰線」を語ると題して、本科百五十六名昨年より約三十名多く更に別科第一回生三十四名の卒業生を加へたが、專業界は不振を極め緊縮一點張りであり、田尻校長は渡歐不在中であつて、條件が頗る惡い。けれども古館校長代理の熱心なる努力と諸教授の援助により、卒業までに九十八人の決定を見たが、なほ三十四人の未決定者があつたことを報じてゐる。おそらく最大の就職難の年であつたらう。六年一月二十七日付「高商學報」（第二十九號）には三面に初號の大見出しで「目睫に卒業期迫り就職戰線は展開する」「どんな處でも口さへあれば」「不況の中に決死の運動」と悲痛な活字を列べ「全國大學專門學校の卒業生約三萬は何處へ行く、暗澹たる就職戰線をめぐつて身の振方へ四苦八苦の態である。各學校と

も就職の斡旋、賣り込み運動に狂奔してゐる」と說明をつけ、本校も本科百三十餘名、別科二十六名の卒業生を出す筈だが、幸ひに田尻校長の大活動で、日本銀行三井三菱等の巨大銀行、明治製糖、滿鐵、大阪商船の大會社を始め八十有餘の銀行會社から一名乃至三、四名宛の申込があり、すでに三、四名は決定し「案外賣行きがよささう」だと報じてゐる。

かくの如く不況のどん底にあり就職に最も困難を極めた時代に、多少明るい報道のあつたのは、卒業式までに就職希望者の八、九割を就職せしめ得たし、八、九月頃までには殆んど全部の就職を實現せしめることが出來た本校當局の自信と實績とを反映するものであらう。

けれども當時の就職がいかに困難であつたかは、申込側の採用條件が孰れも成績優秀、身體强健といふ最上の條件をつけてゐたし、就職試驗がまた頗る難關であつて採用の爲めといふよりもむしろ體よく拒絕する爲めのものともいふべきだつた。蓋、官廳銀行會社の幹部の机には、それぞれ傭手を求めて集まつた履歷書が山積し、やむを得ず斷る口實の爲めに採用試驗をやるといふところも尠くなかつた。「就職戰術」とか「就職の秘訣」等といふ際物的刊行物が、溺れる者藁をも摑むの例への通り盛んに賣れたのもこの頃である。七、八名の採用に千人餘の申込者があつた（東京某大新聞社）などといふのもこの時代の風景であつた。

かかる極度の不況、就職難の時代に、卒業一ケ月後に九割前後（昭和五年は最低で七割四分）の就職決定を見（別表（二二三頁）參照）未決定者も夏頃までには殆んど全部が就職したのであるから、「橫濱高商には入學難は

あるが就職難は無い」とまで世間から謗はれたのも故ありといへるであらう。かかる結果を擧げることの出來たのは、全く田尻校長の獻身的努力の功績であつて、萬人の等しく認めるところである。就職事務を執る庶務課の勞苦もそれだけに一通りでなかつた。

なほ二二三頁の表「卒業一ケ月後に於ケル卒業生就職狀況」は毎年四月二十日現在を以て文部省へ報告した記錄によつて作成したものであるが、昭和八、九年頃までは毎年若干の未就職者を殘してゐるけれども、これは當時三井、三菱、日本銀行等の最有力會社が、學生の勉學を妨げざる趣旨を以て「六社協定」なるものを作り、卒業試驗終了までは採用銓衡を一切差し控へることを申合せ、他の銀行會社も多くこれに倣つたため、就職決定時期が著しく遲れ、隨て前述の調査期日には尙若干の未就職者を殘したのであるが、これも七、八月頃までには全部決定し、長く浪人の狀態にあるものは皆無であつた。

財界好轉と就職狀況　世界的不況はいよいよ激化して來たが、六年六月オーストリアの大銀行クレディツト・アンシユタルトの破綻を口火として金融大恐慌が世界的に波及し、英國が金本位を離脫した。我國でも正貨準備が十月末には七億圓を割る狀態となり遂に十二月金輸出再禁止の止むなきに立到つた。

七年に入るや一月上海事件が起り二月には事件が擴大する。國內には血盟團事件や五・一五事件が起つて物情騷然たるものがあつた。一般產業界の萎靡沈滯、失業者の激增も著しかつたが農村の疲弊はその極に達して社會思想もまた頗る險惡となつて直接行動によるテロ事件が頻發したのである。

七年の上半期は、財界は全面的に極度の沈滯に陷つてゐたが、久しきに亙る不況の繼續中に合理化が進められて事業界は着々と整理され堅實なる基礎が出來、不況は漸く底をついて緩漫ながらやや上向を示して來た。殊に貿易は金輸再禁止に因る爲替低落、國際情勢險惡化に備へる準戰態勢等によつて、輸出入とも顯著に恢復し、前年に比して輸出二三%、輸入一六%をそれぞれ增加し、貿易關係事業と運輸工業には景氣恢復の兆が現はれて來たが、全事業界はなほ未だ不況狀態を脫せず、所謂跛行景氣がここ二、三年續いたのである。オツタワ英帝國會議が開かれてブロツク經濟形成の先驅を作つたのは七年七月から八月にかけてであり、爲替安と生產費安に乘じて世界各國に本邦製品が氾濫し各國の關稅障壁を突破して遂に直接貿易抑壓策を執らなければならぬようになつたのも丸、九年頃であつた。

跛行景氣　とはいへ景氣は上昇して來たから過ぎの就職難も餘程緩和された。八年四月二十八日の高商學報第四十六號には「不況を一蹴して就職率九十パーセント　依然就職界の王者を誇る」といふ見出しが現はれてゐるが卒業までに假令全部の就職決定を見なかつたにせよ、かなり希望のある明るい情勢が反映してゐる。更に翌九年一月二十六日の學報第五十二號には「非常時の波に乘つて採用申込殺到　就職難今いづこ」といふやうな景氣のよい見出しで大會社の採用申込協定（所謂六社協定）が自然消滅して申込は早まり、各會社からの申込殺到で、庶務課はその整理に忙殺されてゐると報告され、事實卒業までに殆んど全部の決定を見てゐるが一月中にすでに六十名ばかりは就職が決定した。まさに「春は朗らか」であつた。

十　思想問題とその對策

不況と思想問題　大正九年の恐慌、十二年の關東大震災、昭和二年の金融恐慌、四年の金輸解禁と緊縮政策、この恐慌のピークの間は不景氣の連續である。會社は事業を縮少する。失業者が出る。農村では農產物價格が暴落して農村恐慌を來してゐるところへ都會からの失業者が流れ込んで來て人口過剩に苦しむ。學生は卒業證書を握つても就職が出來ないで浪人を餘儀なくされる。世を擧げて生活苦の時代である。

この失業苦、生活苦はどこから來るのか、その原因を求めて資本主義經濟組織の缺陷にありとする。階級鬪爭が理論的に展開されると同時に、小作爭議、勞働爭議として實際上勞資の對立が展開する。マルクスの社會主義學說が研究され、社會科學研究會が各學校に出來る。ジャーナリストは共產的理論鬪爭を捉へ、反資本主義學說が大流行となる。理論は實踐によつて裏付けられねばならぬとして、學者が實際運動に投ずる。學生は相率ゐて師の跡につづく。世は滔々としてマルクス、レーニン一色に塗りつぶされた。

かうした時代であるからコミンテルンからの指令が日本の共產黨を左右し、共產黨が學生層に働きかけて、純眞無垢の若い學生を或は赤色思想に無批判に引き入れ、共產團體に無反省に加盟させた。感激性の强烈な、夢の多い、理論のみに趨り易い若い學生の敎化に當る文敎府を始め各學校當局のこの赤化思想に對する對策は洵に苦慮著しいものがあつた。

一方、農民及工場勞働者の勞働運動は益々熾烈を極め社會の安寧秩序を脅やかすほどになつて來たので、政府の彈壓は愈々加はつて來て、思想、實踐双方の團體へ檢擧の手が伸びて行つた。第一次共產黨事件が大正十二年六月、第二次共產黨事件が昭和三年三月所謂「三・一五事件」として八百二十五名が起訴され、第三次共產黨事件が四年四月所謂「四・一六事件」として多數の檢擧を見たが、また大學專門學校の學生の檢擧されるものが各學校に頻々として生じた。

思想對策　政府は思想惡化が專ら不況に原因することを識り、社會的厚生施設―勞働者災害扶助法（六年四月）農村救濟低資利子補給制度（同年六月）失業防止委員會（五年四月）失業對策委員會設置（七年七月）等―に乘り出すと同時に、思想對策を樹て、學生の思想を取締りこれを善導すべく昭和四年文部省は思想善導費十萬圓を追加豫算に計上し又社會敎育局を新設した。この思想善導費は大學高專諸學校に分與されて、各種の思想善導方法に使用された。本校ではこの善導費をゼミナールに於ける懇話會、佛敎青年會基敎青年會等への補助に醵出したが、後にはその一部を以て皆勤者精勤者への賞品に充當して今日に及んでゐる。

學生の左傾思想は洵に國家として憂慮すべき狀態であつたが、畏くも聖上陛下におかせられても御軫念遊ばされ、昭和九年四月、五帝國大學總長を宮中に召されて學生の學修、思想につき御下問遊ばされた。文部當局は更に積極的に思想善導の方途に出て、九年五月には國民精神文化研究所を開設、翌六月には從來の學生部を擴張して思想局を省內に設置した。これは後、敎學局に擴大した。

本校の學生も當時の思潮に影響され、社會問題の研究に沒頭したことは當時の學報の論調や收職記事によつて窺ふことが出來るけれども、極端に趨るものなく、自制して實踐運動へ誘惑されたものは殆んどなかつたのは、恒に穩健中正を尚び、時流に乘る無批判無反省の盲目的行動を嚴に戒めてゐた學校當局の訓育の徹底と、學生自身の批判的研究態度堅持との結果であつたことは疑ひないところであり、時代思潮に棹しながらもこれをよく乘り切つて決して押し流されず、毅然たる姿勢を把持し得たことは、蓋し諮るに足りるであらう。

本校の直接訓育機關は生徒課であつて創立當初から昭和三年までは、官制上、敎授中から生徒監が補職されてゐた。第一次生徒監は栗林敎授、生徒監心得に小幡助敎授が任ぜられ、その後、岩本、藤田、下田敎授が相次で生徒監の任にあつた。昭和三年十月二十九日官制の改正により、生徒監の補職は廢され生徒主事及生徒主事補が任ぜられることとなり、內山敎授が生徒主事兼敎授に、小谷助敎授が生徒主事補、兼助敎授に任ぜられた。その後內山主事の轉任に伴ひ八年十一月以降、岡野敎授が生徒主事となり、又下田、藤田、南雄、不二門敎授が兼任生徒主事となつた。岡野主事轉任により十四年以降は黑澤敎授が主事となつた。主事補は小谷氏の後、九年より十三年まで富成助敎授、十四年より十七年轉任まで武市助敎授が任ぜられた。內山主事及岡野主事初期時代が最も思想問題險惡化し世相甚だ面白からぬ時であつて、生徒主事は事實上、思想主事として文部省、檢察當局等の對策に呼應して、思想對策に異常な苦心を拂はれたのである。

社會敎育へ進出　文部省は思想對策の一つとして且つ專門敎育の社會的開放の目的を以て昭和四年社會敎育局を新設したが、これより先き昭和二年頃から大學專門學校の敎官を勤員して各地に成人敎育講座を開設した。「國民敎育を了へて實務に從事せらるるものに對し須要なる知識を、なるべく平易に講述して國民生活の實情に適せしめん」とする主旨を以て早くも昭和二年十月には文部省より本校に成人講座開設が委囑された。

二年十月三十一日開講、講堂は南吉田小學校で講義時間は每夕六時半から九時までであつた。

講習要目及講師

(イ)　公民科
一、縣政について　　知事　池田宏
二、市政について　　市長　有吉忠一
三、日常生活と法律　　敎授　不二門龍親

(ロ)　商業科
一、橫濱港の重要輸出品と共相手國の經濟事情　　敎授　下田讓佐
二、金融と外國爲替　　講師　森田優三

(ハ)　財政科
一、普通選擧の實施と國民の財政知識　　講師　岡野鑑記
二、地租委讓

成人講座は聽講無料で資格は男子二十歲、女子十八歲以上にして現に在學中にあらざる者は何人でも差支なく聽講が出來、二百餘名の申込があつて盛會だつた。

成人講座に併んで、市民の精神文化涵養のため市民講座が第二隣保館で十月中旬から十二月中旬まで開かれ、本校からは岩本敎授が商業概論、不二門敎授が法學通論、德增敎授が經濟原論を講述し、高工敎授も機械工業、化學工業を講じた。

成人講座は開催當時の社會事情を反映してその講義內容を定めるから、昭和二年以降隔年委囑を受け開講した講座の題目を顧みるとその時代のトピックを識ることが出來る。試みに四年十一月四日から開講された成人講座の題目を掲げると次の如くである。

四日（月）　失業對策の種々相　　德增敎授
五日（火）　緊縮、俳禁、好況　　森田敎授
六日（水）　國債整理問題　　岡野敎授
七日（木）　ファシストについて　　波邊敎授
八日（金）　消費經濟の合理化　　井上敎授
九日（土）　新民事訴訟法について　　不二門敎授

七年十二月九日から四日間横濱貿易新報講堂を會場とした公民（成人が改稱）講座の題目は

一、現代經濟生活の特質　　德增敎授
二、日滿の經濟諸關係の現在と將來　　井上敎授
三、非常時財政の解剖と批判　　岡野敎授
四、最近我國の外國爲替事情　　森田敎授

であつて非常時局をよく反映してゐる。

十一　開校十周年記念式

開校十年間の回顧　本校創立後三年にして世は大正から昭和に代つた。この間、大正天皇御大葬の哀しみ。諒闇、今上天皇御卽位の大典と、國民は國家の大儀を送り迎へまつつた。社會的には世界不況の深刻化による經濟的脅威に曝され失業苦、就職難と思想險惡化に惱まされた。更に上海事件の起るあり、滿洲事變の勃發あり、一方には盟邦滿洲國が建設されるとともに他方にはこれを契機として國際聯盟を脫退するなど國際關係はいよいよ緊迫の度を加へ來つて所謂準戰態勢を執らざるを得なくなつた。

創立匆々の本校としては、これ等內外の多事多端は方に大きな試煉であつた。然るに幸なる哉、田尻校長の獻身的創業の努力の下、敎職員和衷協力し、更に優秀なる素質の學生が全國より來り學んで、業を卒へるや、社會各方面に活躍して國家有爲の人材として母校の榮譽を昂めるありて、本校の眞價世の認むるところとなる。開校十ケ年、それは基礎建設期でもあり搖籃期でもあるが、この建設期に當りて社會不況の嚴しき試煉に遭遇したるは却て愈々勇猛心を奮ひ立たせて將來の發展大成に培ふところとなれるものと信じ、寧ろ本校にとりては天與の惠みであつた。

十年鏤骨彫心の學園を記念すべき開校十周年記念式と記念祭とが、昭和九年十月中旬を期して擧行された。

十周年記念行事日程

十月十四日(日)

一、同窓會主催物故者慰靈祭　午後一時三十分(本校講堂)

一、同窓會大會　午後三時三十分(開港記念會館)

十月十七日(水)

一、近府縣中等學校柔道大會　午前八時三十分(本校道場)

十月廿一日(日)

一、記念式　午前十時(本校講堂)

一、表彰式　午前十一時三十分(同上)

一、名士講演會　午後一時(同上)

演題及講師

國際關係の推移と我國民の覺悟　特命全權大使　出淵勝次氏

日本民族の進出に就て　衆議院議員　安達謙藏氏

一、提灯行列　午後五時(雨天順延)

一、三曲大演奏會　午後五時三十分(開港記念會館)

一、鐵系經濟資料文獻展觀　十四日—二十一日　(調査部閱覽室)

十月廿二日(月)

一、映畫大會　午後六時(本校講堂)

十月廿三日(火)
廿四日(水)
廿五日(木)

一、第三回校內體育大會　各午前八時(本校々庭武道場體育館)

十月廿八日(日)

一、近府縣中等學校劍道大會　午前八時(本校道場)

十一月三日(土)
四日(日)

一、近府縣中等學校蹴球大會　各午前九時(本校々庭)

十一月三日(土)
四日(日)
五日(月)

一、近府縣中等學校籠球大會　各午前九時(本校體育館)

十一月十日(土)

一、祝賀音樂大演奏會　午後一時三十分
午後六時三十分（開港記念會館）

十一月十一日（日）

一、全關東卓球個人選手權大會　午前九時（本校體育館）
一、近府縣中等學校陸上競技大會　午前八時（本校競技場）

十一月十七日（土）

一、室內體育大會　午後零時三十分（本校體育館）

十一月十八日（日）

一、近府縣中等學校庭球大會　午前八時（本校コート）
一、近府縣中等學校弓道大會　午前八時三十分（本校弓道場）

十二月一日（土）
二日（日）

一、外語劇大會　各午後五時（本校講堂）

記念式典　菊薫る秋晴の十月二十一日感激と歡喜に包まれて輝く開校十周年記念式典が本校講堂に催された。定刻、五百の在校生と百餘名の同窓會員で式場の階上階下がいつぱいになる。續て敎職員來賓が入場する。次で校長が先導して松田文部大臣が臨場され、式典が開始された。

横濱高等商業學校 開校十周年記念式次第

昭和九年十月二十一日午前十時

開式

一 君が代合唱

一 校長式辭

一 文部大臣祝辭

一 來賓祝辭

一 卒業生總代祝辭

一 生徒總代祝辭

一 校歌合唱

閉式

十年勤續者表彰式

開式

一　校長表彰狀並記念品授與
一　同窓會記念品贈呈
一　同窓會代表挨拶
一　勤續者代表謝辭

閉式

田尻校長の式辭（要旨）

私が本校校長として赴任したのは大正十二年十一月末であつた。當時横濱は焦土と化し現在のこの場所から見ると一面の燒野原であつた。自分はこれを見て横濱復興のために努力しなければならぬと感じた。大正十三年四月開校し横濱高工のバラック の一部を借受け、そこで授業をする有様であつたが、一年經て現在の場所へ移り、生徒控室と武道場を教場として使つた。その三年目に本館が出來上つた。今日の市の復興と校舍の建築とを見て誠に今昔の感に堪へぬものがある。

さて本校の教育方針は借賴するに足る人物を養成することにある。幸ひ現在まで八百千百人の卒業生を出し、本校の教育方針によつて孰れも社會各方面で大いに活躍してゐることは欣快とするところである。又貿易別科の卒業生も海外において活躍してゐる。本日は意義ある十周年記念日に際し文部大臣閣下を始め縣市の閣下各位の御臨場を仰ぎ誠に感謝に堪へぬところであるが、我々は今後とも自重し協力一致して過去十年の光輝ある歴史を傷けぬようにして行きたい。

文部大臣祝辭

横濱高等商業學校ハ開校十周年ヲ迎ヘテ茲ニ其ノ記念式ヲ擧行セラルルニ當リ一言祝辭ヲ述ブルハ余ノ欣快トスルトコロナリ

惟フニ本校ハ大正十二年恰モ我カ産業貿易ノ大ニ伸長ヲ要スルノ秋ニ際シ我カ國貿易港トシテ樞要ノ地位ヲ占ムル横濱ノ地ヲトシテ創立セラレ爾來啻々トシテ發展向上ノ一路ヲ辿ルコト正ニ十年此ノ間卒業生ヲ出スコト千有餘人校運今日・隆昌ヲ致セルハ慶賀ニ堪ヘズ　抑々十年ハ事物更新ノ一轉機ナリサレバ此ノ機會ニ於テ既往ノ成績ヲ顧ミ式典ヲ擧ゲテ其ノ慶ヲ共ニシ更ニ人心ヲ新ニシテ一段ノ躍進ヲ將來ニ期スルハ誠ニ意義深キ好擧ト謂フヘシ　今ヤ内外事滋クシテ擧國緊張ヲ要スルノ時機ニ際會ス職員各位生徒諸子ハ其ノ責任ノ容易ナラサルヲ自覺シ今日ノ慶典ヲ契機トシテ奮起勵精益々其ノ使命ノ達成ニ邁進セラレンコトヲ望ム

昭和九年十月二十一日

文部大臣　松田源治

東京商科大學長佐野善作氏祝辭

閣下竝ニ諸君

本日此處ニ本校創立第十周年記念祝典ニ參列スルノ榮ヲ得祝辭ヲ呈シマスルコトハ私ノ欣幸トスル所デ御座イマス。

創立記念式ハ近年一ノ流行事ノ如クニナリマシテ官公署ヲ始メトシ協會學校寺社病院會社組合商店果テハ劇場娯樂場ノ類ニ至ルマデ其創立後或年數ヲ經マスト記念式ヲ擧ゲ御祝ヲ致シマス。流行事デアリマスカラ記念式ハ必ズシモ有意義有價値ノモノノミニ限ラズ中ニハ至ツテ詰ラヌモノモアル樣デアリマス。勿論其ノ之ヲ行ヒマス當事者ニ取リマシテハ主觀的ニ有意義デアリ時トシテハ關係當局ノ手段タルコトモアル樣デアリマスガ之ヲ社會カラ見テ客觀的ニ果シテ祝賀ヲスベキ價値アリマ否ヤハ其ノ個々ノ場合ニ就テ判斷スルノ外アリマセン。

ソレデ今本校ノ創立十周年記念式ニ就テデアリマスガ私ハ之ニ甚ダ大ナル價値アルコトヲ認ムル者デアリマス。仍テ其ノ然

ル所以ヲ述ベマシテ以テ今日ノ祝辭ト致シタイト思フノデアリマス。

抑々學校ノ記念式ノ價値ハ之ヲ其現實ノ成績ニ照シテ判斷スルカ又將來或業績ヲ成シ遂ゲ得ベキ力ノ有無多少ニヨッテ判斷スルカ或ハ又右二者双方ニ之ヲ求ムルカデアリマスガ創立十年ト云フガ如キ日尚淺キモノニアリマシテハ之ヲ現實ノ成績ニ徵スルハ無理デアリマシテ將來或成績ヲ擧ゲ得ベキ力ノ存在ニ依テ決メルヨリ外ハナイノデアリマス。而テ私ハ本校ノ場合ニ於テ其力ノ存在ヲ本校教育ノ方針ト教職員諸氏ノ努力トニ認ムル者デアリマス。本校ノ教育方針ノ寔ニ雄偉ニシテ而カモ克ク時勢ニ適合シ教職員諸氏ノ熱誠努力ノ實ニ尋常ナラザルコトハ本校ヲ識ル吾々ノ齊シク認ムル所デアリマシテ是レガ雖テ異常ナル業績トシテ現ハレ來ルベキハマタ吾々ノ齊シク期待スル所デアリマス。

本校ノ教育方針ノ如何ナルモノナルヤハ先刻支關デ頂戴シマシタ「本校要覽」トイフ刷物ノ中ノ「本校施設ノ大要」ト題スル部分ニ掲グル所デアリマスガ之ヲ要約シマスレバ「本校ハ夙ニ現代教育ノ最大缺陷ガ德育ノ不振ニ在ルコトヲ認メ特ニ人格ノ陶冶ニ重キヲ置キ實業家トシテ吾人ノ信頼スルニ足ルベキ人物ヲ養成スルコトヲ目標トス」ト云フノデアリマス。而シテ其ノ「實業家トシテ吾人ノ信頼スルニ足ルベキ人物」トハ如何ナル人物ヲ意味スルヤト申シマスルト其レハ普通世間デイフ所ヨリモズット輪郭ノ大キイモノデアリマシテ窗ニ取引上ノ約束ヲ守ルトカ信用ヲ重ンズルトカ物堅イトカイフ樣ナ人物タルニ止マラズシテ更ニ高邁ナ器宇宏大ナ大乘的ナ人格デアッテ克ク實業家ノ社會的使命ヲ理解シ其本分ヲ盡シ得ベキ實力ト意思ト勇氣トヲ有スル所ノ信頼スベキ人物トイフノデアリマス。卽チ本校ノ學徒ニ對シテ冀求要望セラルル所ハ或學者ノ皆要ヲ借リテ申セバ「人ハ實業家タル前ニ先ヅ社會人タルベク經濟人タル前ニ倫理人タルベシ」トイフノデアリマシテ本校ハ斯ル人物ヲ養成シテ實業界ニ送ルコトヲ教育ノ本旨トシテ居リソレニ向テ校長以下全職員カ不斷ニ精進シツツアルノデアリマス。

御承知ノ通リ我國資本主義產業組織ノ下ニオケル自由競爭制度ハ幾多ノ害惡ヲ生ミ今ヤ殆ンド行キ詰ツテ窮極ニ達シタルカノ如キ觀ヲ呈シテ居リマスガソレハ組織制度ノ罪ト云フヨリモ寧ロ人ノ罪デアッテ最寃實業界ニ其人ヲ缺キ實業家ノ社會的使命ヲ理解セル所謂信頼スルニ足ルベキ人物ニ乏シイ結果デアリマス。故ニ此窮極ヲ打開シ我經濟組織ヲ支持シ向上セシムルノ途ハ唯ダ實業ニ從事スル者ヲシテ克ク其社會的使命ヲ覺ラシメ其本分ヲ盡サシムルヨリ外アリマセン。卽チカカル人物ノ養成ハ寔ニ刻下ノ急務デアリマシテ其養成ニ努ムルコトハ實ニ偉キ事業デアリマス。

今ヤ我商業教育ハ此問題ニ直面シテ從來ノ如ク徒ラニ實際界ニ阿諛追隨シツツ其ノ當面ノ仕事ヤ風習仕來リナドノ末ニ役ニ立ツ事務家ヲ養成スルヲ以テ能事トセズ又單ニ物堅キ保守的使用人ヲ養成スルヲ以テ足レリトセズ一歩社會ニ先ンジ一頭地高キ身ヲ置イテ世ヲ指導シ其風紀ノ肅正腐敗ノ淨化ニ當リ得ベキ闘士ヲ養成スルヲ以テ目的トスルニ至リマシタ。而テコノ方針ニヨル活動ヲ商業教育ノ革正運動又ハ倫理運動ト申シマス。

然リ而テ私ハ今本校ノ田尻校長ノ人格ニ於テコノ倫理運動ニオケル最モ有力ナルチャムピヨンノ一人ヲ見出シ其ノ主宰セラルル本校ガ此運動ノ一大道場デアリ一大陣營デアルコトヲ知リ又今日マデ社會ニ送リ出セル一千有餘ノ卒業生ガ此運動ノ前線ニ立チテ奮闘シツツアルヲ認メ尚現在及將來ニオケル本校ノ學生生徒ガ何レモ此運動ニ參加スベキコトヲ期待シマシテ本校創立第十周年記念式ノ大ニ價値アルコトヲ認識スル次第デアリマス。

私カニ思ヒマスノニ田尻校長始メ本校職員諸氏ハ此今日ノ記念式ヲ擧行セラレソレニ依テ其ノ平素努力セラレツツアル所ノ教育運動ノタメニ內ニ向ツテハ益々人ノ和ヲ團リ結束ヲ固クシ外ニ向ツテハ其意義精神ヲ天下ニ宣明シ之ヲ契機トシテ以テ大ニ爲ストコロアラントノ意圖ヲ有セラルルノデアリマセウ。果シテ然リト致シマシタナラバ此記念式典ハ主觀的ニモ亦客觀的ニモ寔ニ意義アリ價値アルモノト謂ハナケレバナリマセン。私ハ今ヲ距ル八年前大正十五年本月本日本校開校式ニ臨ミマシテ此壇上カラ祝辭ヲ述ベマスルト共ニ其處ニ列席セラレタル橫濱市有力者諸氏ニ對シ失禮デハアリマシタガ聊カ苦言ヲ提シ商業教育ニ於テ橫濱市ノ當時稍々立遲レタコトヲ指摘シテ御注意申シタコトヲ記憶致シテ居リマス。然ルニ今日ハ如何デアリマスカ。橫濱市ニハ立派ナ高等商業ガ二校モアリ而カモ本校ノ如キ倫理運動ノ陣頭ニ立チ大ニ實際界ヲ革正セントシツツアルモノアルヲ見マシテ實ニ今昔ノ感ニ堪ヘマセン。私ハ本日本校ノ記念式ノ價値ヲ十分認識致シマシテ田尻校長始メ本校教職員諸氏ニ對シテ深甚ノ敬意ヲ拂フト同時ニ邦家ノタメ又橫濱市ノタメ衷心ヨリ本校ノ前途ヲ祝福セント欲スル者デ御座イマス。甚ダ不躾ニ長話シヲ致シマシタガ之ヲ以テ祝辭ト致シマス。

なほこのほかに樞山知事大西市長有吉商工會議所會頭ボイスアメリカ總領事渡邊名古屋高商校長の祝辭があつた。

十年勤續者表彰式　開校十年記念式典終了後引續いて十年勤續者表彰式に移り、校長敎授嘗記守衞使丁二十二氏に對し學校より表彰狀と記念品授與、同窓會より記念品の贈呈があつた。

表彰狀

官職氏名

本校創立以來精勵恪勤克ク其ノ職ニ任シ勤續玆ニ十年功績勘カラス仍テ之ヲ表彰ス

昭和九年十月二十一日

横濱高等商業學校長正四位勳二等　田尻常雄

十年勤續者

氏名	任命年月日	在職年月數
校長田尻常雄	大正一二、一二、一八	十年十ケ月
敎授下田禮佐	同一三、一、二二	十年九ケ月
同古館市太郎	同一三、三、一五	十年七ケ月
同不二門龍覩	同一三、四、二二	十年六ケ月
同河村重治郎	同一三、五、一七	十年五ケ月
同德增榮太郎	同一三、八、三一	十年一ケ月半
同時田清	同一三、八、三一	十年一ケ月半
同渡邊輝一	同一三、二、二九	十年七ケ月半
同小幡孫二	同一三、四、二	十年六ケ月半
同下津屋俊夫	同一三、三、三一	十年六ケ月半
講師小白寬	同一三、三、三一	十年六ケ月半
同山崎與右衞門	同一三、四、七	十年六ケ月
書記齋藤照之助	同一三、一、二三	十年九ケ月
同矢島熙	同一三、三、三一	十年六ケ月半
同吉居德治	同一三、四、一一	十年六ケ月
雇植岡金次郎	同一三、三、三一	十年六ケ月半
同櫻井巳之吉	同一三、四、一〇	十年六ケ月
守衞鈴木二郎	同一三、六、八	十年四ケ月半
小使澁谷省三郎	同一三、五、一四	十年五ケ月

同　手束松太郎　同　一三、四、一　十年六ケ月半
同　關谷なか　同　一三、四、三〇　十年五ケ月半
雇　小川ゆき　同　一三、一一、五　九年十一ケ月半

午後一時から本校講堂に於て次の如き名士講演があり頗る盛會であつた。

國際關係の推移と我國民の覺悟　出淵勝次氏
日本民族の進出に就て　安達謙藏氏

調査部閲覽室には調査部の蒐集保管してゐる鐵糸經濟資料二百五十四點を整理展觀して一般の興味を惹いた。

夜は開港記念會館に三曲大演奏會を催し、學生の提灯行列が、學校正門から伊勢佐木町櫻木町驛前紅葉坂の順路を經て伊勢山太神宮に參拜萬歳を三唱して野毛、日之出町前里町を歸路にとつて學校へ歸着し、學校を祭げて祝賀に徹した。

記念祭の夜のどよめきを偲ばせる記事を「學報第五十八號」から轉載しておかう。

丘上に月微笑む歡喜の渦巻

舞へや歌へや若人の意氣

秋の夕暮、丘の白堊も金色に映えプラタナスもその長い影を地上に落す頃、お祝の赤飯に腹を拵へたカレツヂヤンは晩秋の

寂さも物かは、元氣一杯で不二見ケ丘を街道に進出して行つた。各々大きな提灯のやうなお提灯を高くかかげて「高商よいとこ、十とせの祝よ」の連發だ。丘の上り口の巡査がにこにこしながら「學生諸君大いにやるべし」。これより整然と四列になつて前里町より伊勢佐木町さして乘りこんで行く……「高商々々横濱高商は野球が強い……」街の兄貴が盛んに應援する。伊勢佐木町に入れば折からの雜閙もサツと二つに割れて沿岸に垣を築いた群集が盛んな拍手を送る「高商頑張れ」……提灯の光りもまばらになつて丘を登る。月冴えて白堊が夢の城の如く輝いてゐる。月光に滿ちた校庭に歸屋寮が友待顔にポツンと突立つてゐる。今宵一夜は裸になつて踊り狂ふ意氣込だ。さあ踊れよ十とせの祝ひだ。手拍子足拍子恰好よろしく太鼓に合せてドドンと踊りぐるぐるまはる。秋の夜空は益く澄んで月も微笑む狂喜のカレツヂヤン、天にも響けとさんざめき大地も動けと踊り狂ふ。高商よいとこ、十とせの祝ひよ。

慰靈祭　記念式典に先立ち十月十四日午後一時半から本校講堂に於て、物故教職員、同窓會員、在學生七十六名の慰靈祭が、神式により嚴肅に執り行はれた。遺族、教職員、同窓會員、生徒參列、校長祭文を奏して物故者の冥福を祈つた。物故者は教職員では生徒主事補兼助教授小谷憲一郎氏、囑託湯川和平氏、雇員鈴木茂三氏の三氏、同窓會員千ケ崎博君等四十氏、在學生三十三氏（寫眞參照）であつた。

祭文

維時昭和九年十月十四日横濱高等商業學校同窓會員相謀リ玆ニ濟壇ヲ設ケテ物故職員同窓會員並ニ生徒諸君ノ靈ヲ祀ル

本校創立以來正ニ十春秋其ノ間ニ永訣シタルモノハ職員ニ於テ生徒主事補兼助教授小谷憲一郎君、囑託湯川和平君、雇員鈴木茂三君、同窓會員ニ於テ千ケ崎博君外三十九人、生徒ニテ鶴岡立朗君外三十二人即チ合セテ七十六人ヲ算ス

顧ルニ物故職員ハ共ニ熱誠職ニ盡シ私ヲ棄テテ公ニ就キ病魔ノ身ニ迫ルヲ知ラズ終ニ身ヲ以テ職ニ殉シタル者ニシテ實ニ公務員ノ典型タルニ恥チズ。物故同窓會員ハ皆學ヲ本校ニ修メ螢雪ノ功空シカラズシテ已ニ各々職ニ就キ之ヨリソノ證得セル人

格識見ヲ以テ之ヲ小ニシテハ一家ノ爲メ大ニシテハ國家社會ノ爲メニ大ニ貢獻スルトコロアラントシタル者ナリ國ラズモ不幸中道ニシテ或ハ二竪ニ痾サレ又ハ不慮ノ災厄ニ逝ク而モ其ノ齢ヲ問ハズ皆而立ニ達セズ痛想歇ソ堪ヘム。更ニ故宮川保君ニ至リテハ滿洲ニ於テ匪賊討伐ノ發戰ニ殪レタル者ニシテ一死以テ國恩ニ報シタルモノナリ

又在學中ニ死去シタル三十餘名ノ生徒諸君ハ志ヲ立テテ兩親ノ膝下ヲ辭シ本校入學ノ榮冠ヲ贏チ得タル年少ノ英才ナリ然ルニ天道此人ヲ嫉視シ未ダ弱冠ニシテ夭折スルヲ嘆惜スル者豈獨リ兩親遺族ノミト言ハンヤ

想フニ方今國際間ノ經濟戰ハ日ニ熾烈ヲ加ヘ國家ノ英才ヲ待望スルコト今日ヨリ急ナルハナシ此秋ニ當リテ七十有餘ノ英魂ヲ祀ル吾人ノ感慨轉タ深シ然リト雖モ人各〻命數アリ徒ラニ歸ラザルヲ追想シテ止マザルガ如キハ男子ノ本懷ニアラズ我等ハ協力一致奮發一番以テ不二見ヶ丘學園ノ本領ヲ發揮シテ亡友ノ志ヲ達成セムコトヲ期ス

今玆ニ本校開校十周年ヲ迎フルニ方リ慰靈祭ヲ催シ聊カ在天ノ英靈ヲ慰メントス希クハ來リ參ケヨ

横濱高等商業學校長　田尻常雄
同窓會長

記念行事　豪華版の一つは十一月十日開港記念會館を會場に充てた祝賀大演奏會である。東京音學學校生徒三百十名の管絃樂團と合唱團といふ大がかりのものだつた。本校音樂部員の「校歌」「祝歌」についで最初に演奏されたのは管絃樂ゴールドマルク作曲の樂劇「サランタラ姫」序曲。次てシューマンの「夢」メンデルスゾーンの「おお雲雀」の混成合唱。井口基成氏のピアノ獨奏。管絃樂「アルルの女」第二組曲。マリア・トル女史のソプラノ獨唱等々文字通り音樂界第一人者の妙技に聽衆はただ陶然たるのみであつた。

十二月一日二日の兩日、命港名物と噺される外語劇大會が本校講堂で開催された。十周年記念行事といふのでこの外語劇大會を街頭に進出させようといふ語學部員の張切り方だつたが、會場はつつましく本校内としたが、語學研鑽の汗を注いで築き上げた金字塔だけに、エキゾティックな夢幻境を現出して記念祭掉尾の華を飾つた。スペイン語劇「デメトリオ・モンターノ」の綜合的迫力。支那語劇「五祖と六祖」の坊主ばかりのユーモラスな場面、英語劇の「ヴェニスの商人」、獨語劇の「世襲山番人」、佛語劇「スカパンの詭計」孰れも學生の演技としての目標を立派にやつて退け頗る好評であつた。

約二ケ月に亘る記念行事は上掲プログラムの示すやうに本校主催の各種體育競技會があり、その間には學友會各部の秋のスポーツ行事も織込まれて内容豐富に十分十周年の記念祝賀を果した。

記念事業　一、圖書目錄作成　學生の圖書館藏書の利用度は著しく高く、しかも年々その率が上昇の傾向を辿り（別表「閲覽狀況」參照）藏書數も逐年增加して來るので、圖書利用者の便宜のためには圖書目錄作成が急務であつた。しかし之には相當大きな費用が要るので實現は容易でない。ここに於て十周年記念事業の一つとして圖書目錄作成の件が執上げられ、八年末から準備に着手、分類整理、原稿の完成を急いで九月下旬漸く脫稿、十年十月に至つて印刷完了した。全卷六百三十頁、約一萬四千册の和漢洋藏書を收載してゐる。この目錄は關係諸學校諸官衙圖書館に寄贈した。

二、プール建設　水泳部は昭和五年に學友會の一部として創設されたが自校プールを持たないために部員は非常に不便不利であつたし地方高商でも夙くから自校プールを持つものが少くなかつたので、プール建設が記念事業の一つとして執り上げられた。記念式準備に着手した九年六月頃から、學友會各部幹事評議員より成る實行委

序文及收載論稿の目次、次の如し。

序

回顧すれば十年前、横濱復興に魁して本校は灰燼の港都に創立されたのであるから、その使命の殊更に重きを痛感し、駑馬に鞭ちつつ日夜邁往に專念、然かもなほ足らざらんことを怖れた。而てここに年を閲する十年、本校が聊かなりとも復興の横濱に寄與するところありとすれば本校開設の趣旨の一班は遂せられたと言ふべき歟。

創設以來、本校は「信頼し得る人間を作る」ことを以て校是とし、大家族主義を標榜して協力一致、只管學問の向上、教育の徹底に邁進して來た。斯くて不斷の研鑽は穩健清新の學風となり、不撓の邁往は克く醇朴敦厚の校風を興し得たことは洵に悦びに堪へないところである。

今、開校十周年記念の祝典を擧ぐるに當り、記念論文集刊行の企てあるや、全教官が各自の蘊蓄を傾けその專攻するところを發表して一大論文集の編纂せられたるは、偏へに本校教官の平素眞摯なる篤學研究の結晶に外ならない。是れ予の最も欣快とするところである。

一言以て序とする次第である。

昭和九年十月上浣

田尻常雄

目次

第一部

白人の人口減少とその影響　下田證佐
法律行爲の解釋　大竹敏雄
商品保存問題　南龍展博
海上保險に於ける塡補の種類　岩本啓治
人間の自然的人間學的性格と「計畫學問」の問題　渡邊燁一
燃料問題に對する一考察　田尻彦幸
貸借對照表論の推移と標準貸借對照表　古館市太郎
勞力價値學說　井上鐙三
—國民社會主義經濟學の一齣—
權利行使の方式　不二門龍親
英國の減債基金制度　岡野經記
本邦移植民の憫勞と其將來の發展策　福田要
商業管理への補助としての標準減價相の觀察　小宮山敬保
我國製紙業に於ける產業統制　井上龍三
—特に洋紙の抄造業に就て—
イギリス重商主義學說と其社會的背景　德增榮太郎
價格分散と景氣變動　森田優三

第二部

マヤの考古學から見たアトランティダ大陸の假說　岡田俊
コーヘンの論理學に於ける體系概念　富成喜馬平
ディツケンズの聚人　伊東彌
Igls Letter の書き方に就て　光井武八郎
Otto Ludwigs Meisterwerke　山中節三
新渡戸博士著「武士道」の研究　西村稠
取殘された問題　河村重治郎

講師

體操、教練　小白　克
珠算　山崎與右衛門
商業大意　福田　要
修身、國語　永積安明
獨逸語　山中郁三
修身　富成喜馬平
商業作文、書法　藤田義雄

外國人講師

英會話　ジー・エッチ・コース
西班牙語　カルロス・ヒメネス

傭外國人教師

英會話、英作文、文法　ジー・テイー・ブライアン
英會話、外國商業實踐、英文簿記、タイプライテイング　イー・エム・カメロン

柔道教師　阿部信文
劍道教師　田口巳之吉
弓道教師　平松精二

書記

會計課　齋藤照之助

職員

庶務課　矢島熙
會計課　吉居德治
教務課　湯川眞藏
圖書課　增田彌之助
生徒課　窪田保春
調査部　野口勝利
庶務課　高林義雄
會計課　川野亮一
運轉手　植岡金次郎
圖書課　葭間長治
守衛　櫻井巳之吉
教務課　增田榮蓉
商品課　增田武雄
會計課　小川ゆき
同　佐藤久子
庶務課　湯川嫻子

校醫

松岡長一郎

事務分掌

教務課主任　教授　古館市太郎
副主任　同　井上龜三

書記　湯川眞藏
雇　增田榮喜

生徒課主任　敎授兼生徒主事　下口禮佐
同　南種康博
生徒主事兼敎授　岡野鑑記
講師　小白寬
雇　窪田保春
書記　矢島熙

庶務課主任　雇　高林義雄
臨時雇　湯川嫻子
書記　齋藤照之助

會計課主任　同　吉居德治
雇　川野亮一
同　小川ゆき

臨時雇佐野久子

圖書課主任　敎授　下田禮佐
副主任　同　井上龜三
書記　增田彌之助
雇　鹿間長治

商品課主任　敎授　南種康博
助敎授　田尻彦幸

職員及傭人表

（昭和九年十月一日現在）

寮務課主任　雇　增田武雄
敎授　南種康博
講師　羅田要
同　藤田義雄

翻譯部部長　敎授　德增榮太郎
同　岡野鑑記
同　渡邊輝一
同　井上龜三
同　井上鐵三
同　森田優三
雇　野口勝利

二、生徒

生徒數

（昭和九年十月一日現在）

種別 ＼ 官職	校長	敎授	生徒主事	助敎授	書記	生徒主事補	講師	傭外國人	外國人敎師	囑託	武道師範	雇員	校醫	守衛	給仕	定夫	小使	計
定員		二	二〇	一	六	六	一											三五
現員（在外研究中ノ者ヲ含ム）		二	一九	一	四	五		六	二	二	二	三	二	二	二	三	三	七六

本科

學年	第一學年	第二學年	第三學年	計
貿易別科	一八二	一五〇	一三二	四六四
計				三三

本科入學志願者及入學者累年比較表

種別 / 募集年次	入學志願者 中學	入學志願者 商業	入學志願者 計	入學者 中學	入學者 商業	入學者 計
大正十三年度	七三八	二九〇	一、〇二八	八四	五〇	一三四
大正十四年度	七四九	三九四	一、一四三	一〇二	五二	一五四
大正十五年度	六一一	三三六	九四七	九四	五七	一五一
昭和二年度	七二三	二九七	一、〇二〇	一〇七	七〇	一七七
昭和三年度	七〇三	三四五	一、〇四八	八六	五九	一四五
昭和四年度	九二五	三四八	一、二七三	八三	六二	一四五
昭和五年度	七七五	二七三	一、〇四八	一〇九	五〇	一五九
昭和六年度	七〇八	二二三	九三一	九六	五四	一五〇
昭和七年度	七九三	二二七	一、〇二〇	一〇四	五四	一五八
昭和八年度	九〇一	二七八	一、一七九	一〇一	五一	一五二
昭和九年度	八八一	二五五	一、一三六	一一六	四九	一六五

貿易別科入學志願者及入學者累年比較表

種別 / 募集年次	入學志願者 中學	入學志願者 商業	入學志願者 計	入學者 中學	入學者 商業	入學者 計
昭和四年度	二〇五	三五	二四〇	三五	四	三九
昭和五年度	七二	二六	九八	二九	一	四〇
昭和六年度	三七	六	四三	二二	五	二七
昭和七年度	三四	七	四一	二三	五	二八
昭和八年度	五〇	七	五七	二九	四	三三
昭和九年度	八三	一四	九七	二九	六	三五

本科生徒原籍調

（昭和九年十月一日現在）

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一一	茨城	一五	青森	二	和歌山	三
東京	六四	奈良	一	山形	七	德島	三
京都	三	三重	六	秋田	八	香川	二
大阪	五	愛知	四	福井	六	愛媛	五
神奈川	七八	靜岡	四四	石川	七	福岡	七
兵庫	三	山梨	六	富山	二	大分	五
長崎	二	滋賀	五	島根	四	佐賀	四
新潟	一八	岐阜	三	島取	一	熊本	一八
埼玉	六	長野	一五	岡山	一	鹿兒島	二
群馬	一四	宮城	六	廣島	六		
千葉	一二	福島	一五	山口	六		
栃木	一五	岩手	一〇	高知	四		
						計	四六四

貿易別科生徒原籍調

（昭和九年十月一日現在）

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	群馬	一	山形	一	熊本	一
東京	五	栃木	一	福井	一		
大阪	一	茨城	一	島取	一		
神奈川	三	三重	一	福岡	一		
兵庫	三	靜岡	三	大分	一		
新潟	一	長野	一	廣島	一		
埼玉	三	岩手	二	計	三三		

本業生狀況

（昭和九年十月一日現在）

種別＼科別及回次		本科 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回	第七回	第八回	貿易別科 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
官公吏		七	七	九	一五	一一	一五	九	四	六	三	三	二	一
學校敎員		八	五	六	七	七	七	三	一〇九	一五	八	三	八	一二
銀行會社員		七五	八五	八五	九七	九三	九九	九九	一〇九	三	一	一	九	一
新聞雜誌社員		一	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
個人商店員		六	八	七	八	六	八	五	一〇	一	五	三	五	三
自家營業者		八	一三	一二	一三	六	一五	八	一〇	三	一	一	三	四
上級學校入學者														
入營者						四	一五	一二	一〇	一	一	一	四	五
外國留學者														
南米渡航者														
死亡		七	六	九	六	一	一	二		六	二	七	四	六
不詳		五	三		七	五	五							
計		一一七	一三〇	一一二	一五六	一三三	一四四	一四四	一四五	三四	一九	二三	二七	三一

備考　入營者欄中△印ハ現職ノ儘入營セル者ヲ示ス

三、研究資料

圖書及雜誌

（昭和九年十月一日現在）

種別		數	種類
圖書			
和漢書		九、一六二册	五一種
洋書		七、四〇七册	四四種
計		一六、五六九册	三〇種
雜誌			
和雜誌			一二五種
洋雜誌			
其他定期刊行物			
計			

調査部保管資料

（昭和九年十月一日現在）

一、官公署銀行會社諸團體公刊資料パンフレット類……約五、〇〇〇部

二、同　上……定期刊行物……（内國）二一〇種（外國）二〇〇種

三、重要新聞記事審抜カード……三種

四、銀行會社考課狀……（内國）五八〇社（外國）一五社

商品標本及機械類表

（昭和九年十月一日現在）

種別	數量	價格
商品標本	三、八一五	九、九〇〇圓
機械器具	二、一四九	二五、八五〇圓